# 書簡

## (一) 井上友一郎宛（於米國）

先日は御佳□被下誠ニ難有奉謝候。愛兄ニは不相易御壯健ニ被爲在御信仰も追々御進歩之由大慶ニ被存候。過日來吾日本ニも種々憂ふ可きの事件起り嘸々御□慨之御事と遙察候。小弟も當國ニ來り增々日本之事を思ふの情頻ニ相成日々帰來之□□□□□□□□□。

過日イス・フキールドと申す処ニ設けたるムーデーの夏期學校ニ參り、米國其他世界の諸大學校の學生五六百名及百名ある人々ニも面会致し其家庭へ招かれし事有之候ひしがムーデー・は□はぬ偉大之人物□彼は無學で學者學生を己の子弟の如く薫陶支配スル有様は感服之至り。又其の大事業、男女學校、青年會等實ニ可驚働を致居候。其祕訣は如何といふニ只至誠至愛也。彼が說教中滿場の聽衆をして感憤涙泣ニ耐エザらしむること屢々有之候。愛兄よ德力は学力金力ニ勝ることを如之なる事實ニ□。其他サシキーの歌抔感嘆の至り。何れ近々妻之弟服部他之介歸朝致候間彼より御聽被成下候。小弟の事情をも彼より御咄可申候。愛兄之御住處不承知ニ候間河村方より此書御送り可申候。家内事種々御厚情ニ預り難有奉謝候。

草々不盡

在米

成瀨仁藏

（明治二十四年）
七月廿日

井上友一郎愛兄

## (二) 麻生正藏宛

(1)

拜復先日おはなし申上候新潟の有志者は二名有之。一名は眞に再興を希望するもの他の一人は或ハ御世辭半分ニ申越せし事ニ存候。後者他の一人之方は隨分新潟ニては勢力ある者ニ御座候。且つ彼は若し誰か再興に盡力スレバ（十分の見込立たば）應分の事は爲すの人物ニ御座候へ共決して自ら衆人ニ先んじて盡す様の熱心は無之かつ御承知の通、新潟の教育事業は是迄度々の失敗ニて大ニ信用を落し今度は十二分の見込立たざれば誰も應ずる事無之と信申候。是れ先年小生が處々遊說せし時經驗せる事ニて其節も後廢校の慮ありとて應ぜざるもの多かりき。併し小生自ら彼地ニ□臨し非常の決心をもてかゝれば望なきにあらず。如何トナレバ小生は右兩人を知るのみならず他ニ多くの知人ある故十分の運動出來可申御座候。併し余が信任ス

ルモノを推薦致候ても其功能甚だ薄弱ならんと存じ候。是れ已ニ經驗する處ニて先年小生が越後を出でんとするニ際し其の後任ニ澁谷を推薦せるニ、六ケ月彼ヲ試ミ然る後ニあらざれば信ずるを得ずと容易に信ぜざりし。是れ只後任の事でさへも斯く面倒なりし。加之澁谷は越後人ニて已ニ其名は少しは知れ居りしニ。然れば未だ十分の時期到來せざる内ニ（未だ彼地の人氣振ハズ）小生の十分信任スル友人を紹介スレバとて再興は甚だ覺束なく相感申候。如何トナレバ彼らニ其心あるニあらず此方より彼らの心を引起さゞる可らざるの地位なれば也。尤も其内かゝる時期も到來す可しと信申候。實ハ其内前述之二名の内一人來阪致候間相談致見度相考申候。然れば尚ほ十分事情相分り可申と存候。小弟も多分七月中旬ニは御地へ罷出度候間其節十分面談可仕候。

望月兄の將來の働ニついては小生も乍不及愚考致見度候。御返事迄。

草々不一

（明治廿八年）六月九日　　成瀬仁藏

麻生大兄

（以下追記）

日曜日ならば小生より出來致し候ても宜敷候。併し兄の御考へニて御□し被下候へば其上ニて小生も拜見せば十分成と存候。尤も愛兄の御高見如何（斯る檄文ヲ出ス事の）。若兄御異見あらば可教示願度御座候。

先日は御苦勞千萬難有存候。其後相談の上一昨日活版處へやり明日中ニ出來可申と存候。

扨て其節お咄申上候大阪へ置くの理由及大阪人士の此擧を賛翼スべき道理は別ニ印刷に附し大阪人のみニ旨趣書ニ添へて與へる事ニ致度候。就而ハ再び乍御苦勞右の旨意ニ基き御起草被下間敷候や。及御依頼候也。

大阪ハ三府の一ニして日本第一の商業地……富源……等ニして一の教育中心（チュウシン）ヲ有せざる事……東京は帝國大學あり京都ニも……大學興らんとす……然る上は大阪ハ他の二府ニ劣らぬ財力を持ち乍ら日本の教育を意とせざる感ハなきや……又教育ト伴はざる繁昌の危き理由――大阪を文化スルニは教育中心トナルベキ一大學を有す可き事……日本女子大學を大阪ニ得るは卽ち一般教育の中心点ヲ得る道理……また關西は完備女子學校なき事……大阪ハ今日の富を有し日本の女子教育の父母國たる希望はなき乎……富を有スル

(2)

モノは天下の爲ニ盡する義務責任ある事…等を陳述したる檄文を草し之ヲ大阪府民ニ分ち警醒致度候。願くは其意をもて一文ヲ草し被下間敷候や。實は旨趣ト共ニ分配致度相考候間可成至急御着手被下間敷候や。

右御依頼申上度候。如此御座候。

草々不一

二白

若し相談の上ならでは御起草六ケ敷候ハヾ乍御苦勞再び御來阪被下候へば難有存候。

（明治廿八年）六月十九日　成瀨仁藏

麻生愛兄

(3)

拜啓御多忙の際非常之御盡力□□□候。素より成功の日を急ぎ居候へ共無理なる御働をなさしめては不相濟。願くは十分の時日は用ゐ被下度候。

御返書ニ「今一週間」云々と御認めて相成りしは其書を認めし日より一週なるや。或は六日より一週間の御積りなるや伺度候。兎も角來ル土曜卽ち十二日の朝御地迄罷出日曜日中ハ（之ヲ要すれば）凡事打合せを爲し其より直ニ東京へ越すことに致度、尤も尙ほ猶豫を要すれば尙ほ延引可致候。若し十二日ハ早過ぎ候へは直ニ御一報願度。實は今日より學校之都合を付け居り申候。

要用而已

草々

（明治廿八年）十月四日　成瀨仁藏

麻生正藏樣

(4)

昨日は熟談するの暇のなき爲め匆々歸阪致し遺憾の至ニ存候。實は今日書面認め十分の意を顯はす積ニ候処何分入り組ミたる事情なれば到底筆紙ニ難盡候間事情御推察被成下度候。玆に何とか精神を凝らし（善）前後策を仕度ことに存候。小生の愚按ニは是非大兄の代りを見出し少々の事情と不都合は不得止る事となし代りの出來次第一日も早くといふ事ニ致されては如何。是れ素より今度の新内閣組織の如き困難はあるべきも亦た道なきニはあらざる可しと存候。

何れ其内お目ニかゝり委細申陳度と存居り候。蝙蝠傘なき爲めさぞ御不都合とお察し申し候。可成早く御戻し申度と存候。

小崎君ニは理屈を並べるよりも種々事情を陳べ嘆願致置申候。余情は申残候。

匆々

（明治廿九年）九月八日　仁藏

正藏兄

(5)

（追記）

山岡の学力人物ハ能く不存候が彼ハ同志社ニ用る処ハなきものニ也。

彼ハ今位置を探しつゝあり。

御地の水は如何奉伺候。當方ニ於ては一昨夜より浸水致居候へ共未だ疊までハ達せず候。之より床下を乾すこと容易ならざる事ニ御座候。

御申越之件拜承御陳述の御事情ハ素より御尤之事ニて小生も同感。先日御決心云々申上候は小生が小崎校長ト談判之末兄の代りの有り次第……故ニ代りを熱心にかつ至急ニ索搾する事の方針を取て御決行被下度と御依頼ニ及ビ候わけに御座候。廣岡へ御意相傳へ申候。女も申さるるに君が初より此事業ニ掛り呉れなば將來之爲め双方の爲めよからんと。素よりその必要を繰り返すニも及ぶまじ。只今日は善後策を講ずるのみと存候。實ニ今ハ時機失する可らず愈々切迫致候。願くは大兄と全力をこめ直に運動を始め度切望ニ不耐候。是れ吾人の一生の時機亦た此事業のクリチカルタイムなるにあらざる乎。非常の時ニ非常の処置も必要と相成申候。御熱心ニ御盡力あらば何トカ方法付く可き事と愚考致候。委曲ハ御面會之上申陳度候。

匆々不一

（明治廿九年）九月十日　仁藏

正藏兄

(6)

拜啓小生の上京（西京）ハ大津兼ぬる積之処種々都合有之日々延引致候。尤も両三日中ニはと考居候。小崎校長より本年中ハ六ケ敷様申來候。若し左様相成候へば是非一ケ月間の缺席を許可せられ候様（マヽ）斷判を付け度ものと考居り申候。委細ハお目ニかゝり可申述候。

匆々

（明治廿九年）九月十七日　仁藏

麻生兄

(7)

其後御令閨樣ニは御快方ニ御座候や御伺候。

扨て小生ハ多分五六日頃ニ上京の途ニ就く可しと存候。其迄尚ほ一度御地へ罷出度と存候へ共若し愛兄の御働ニより左之二名賛助員ニ御誘導出來候へば甚だ好都合と相考申候。即ち内貴甚三郎氏及西村治兵衛氏ニ御座候。之は濱岡光哲氏より名刺なり紹介狀なりを御貰ひ被下其を御持參相成候へば上都合と存候。而して若し愛兄の御出六ケ敷時ハ近日の内（三四日頃）小生自ら參り候ても宜敷候。兎も角濱岡氏ニ至急御面會被成下右御相談之上宜敷可取計ヒ被下度奉希候。而して御都合至急御一報成し被下度御待候。

右要用而已

匆々

（明治廿九年）
九月卅日

成瀬仁藏

麻生正藏兄

二白　万一小生其爲上京を要スル場合ニは濱岡氏の紹介狀丈前以て御貰置を願度候。

(8)

昨日は御馳走ニ相成難有奉存候。扨て御申越之件は承知仕候。小生も至極賛成しかつ大ニ望む処ニ御座候へ共、事mに關すれば小生の自ら決定する場合ニ無御座候間、上京之上一應廣岡ニ計り確答可申上候。浮田氏へハ同志社より是非願望被致候故、當方ニ於ても其事情を酌量しかつ當方の都合も暫時之猶豫は出來ざるニもあらざれば當分其の願を入れ候も、必要之場合ニは缺勤を許す可しとの事ニ相談致置候。小生ハ明朝より出發上京致す筈ニ致候處、今朝廣瀬宰平氏より傳聞する處ニよれば西園寺侯ニは明後卅日神戸へ着され十二時間の上陸被致候よしニつき、侯を見送りかつ依頼す可き件をも濟し其より上京の途ニ就くの考ニ御座候間、此段一寸御通知申上候。

草々不一

（明治廿九年）
十一月廿八日

成瀬仁藏

拜

麻生大兄

(9)

拜啓別紙郵便爲替の通小生の及ぶ限りの金策致し御送附致候間、御落手被下度此上の處は乍御迷惑何トカ……

奉願候。

小生は冬より正月中旬頃までは他の地方ニ引籠りをる積ニ致候

故ニ正月の祝詞も呈せざる積り故……。
委曲はお目ニかゝり可申述候。用事而已

草々

（明治廿九年）十二月廿五日　仁藏

麻生兄

金五十圓

一口金參拾圓――差出人　東京府麴町区紀尾井町六番地　村井方　成瀬仁藏

一口金貳十圓――差出人　東京府麴町区紀尾井町六番地　村井知至

(10)

一昨日は御馳走ニ相成難有奉謝候。
其節大隈伯の演説の草稿之議御依頼致候ひしが、此上甚だ御苦勞乍ら伊藤侯の演説も御起草被下間敷候や。比段切ニ御願申上候。小生の演題を至急申送る可きなるが「女子教育振起策」「女子教育の復活」の何れかを擇び度存候。之ニつき大兄ニは如何御思ひ候や。大至急御意見申越シ被下度願上候。
廣岡淺子ニは今夕方歸阪の事と相考申候。
右要用而已

匆々

（明治廿九年）十二月廿八日　成瀬仁藏

麻生兄

(11)

（追記）
二白　都合ニより銀行爲替ニ致候。左様御承知被下度候。
御申越の通金拾圓郵便爲替ニて御送り申上候間、御落手被下度候。
小生の演説原稿は其内御廻はし可申上候間、今度は隨分大切の事故文章に直し置く事必要と存候。宜敷御願申上候。
伊藤侯の分ハ其内可申上候。
京都の纏方は出來る丈御盡力願上候。
中村榮介君は（細君）発起人ニ願ふ事如何御思召に候や。又大津の藪内様も如何の事ニやと相考候。
要用而已

匆々

（明治廿九年）十二月卅日　仁藏

麻生兄

(12)

先日來御苦勞千萬に奉存候。小生ハ昨日來土倉氏ニ罷在候。土倉氏ハ來ル十五六日頃より上京の事ニ決定。発起人會其他ハ東京ニ於て豫定致候通履行致事被爲致候間、其準備の爲非常に多忙を極め居候。小生は明日より上京可致候。廣岡夫人は明日頃より多分上京可被爲致候。土倉氏ハ開会の主意を陳べるとの事。

万寿枝の事も相談に及ひ申候。種々の準備と又例の事と可成至急着手可致ニつき是非大兄の御上京を要し候間、是非々々來ル十五六日頃ニハ御上京願度候。

小崎君へハ只今書面差出申候。其意味ハ何分都合つけ蔵生君の辭職聞届け貰ヒ度……併し例の非常の御事情有之。今暫くハ是非とも御留め出來候へば、來ル十五六日より春期休業をかけ暫時他行を許可被成下ル樣ニ申送り候。

可成早く御上京の程奉願候。

此の一ケ月間ハ此事業の勝敗の決まる危機一髪の時と存候。

愈々一大劇戰の時と相成候。願くは益々勇を鼓して御上京被成下度希望不耐候。

奥樣によろしく。

匆々不一

於大瀧閣

成瀨仁藏

(明治卅年)
三月九日

蔵生正藏兄

二白　小生ハ今午後より歸阪致候。

(13)

(追記)

本日ハ帝國教育會ニ於て演說致し只今歸宿致候。

拜啓只今小崎校長より書狀參り誠ニ御尤も千萬と存候共當方も實ハ手が足らぬ。本日も大に手遲れ致し後ニ歸らぬ事出來致候。而して來週より例の準備ニて非常に多忙を極め到底小生一人ニてハ手廻らぬ爲大不都合を生じ他ニ人を得るわけに參らず候。是非小崎校長ニ懇願其許可を得度ものと希望ニ不耐候。

素より同志社の方も大切ニ御座候へ共只今ハ御存知之通此事業の運命の定一(る脱カ)大時機ニつき右の事業愛兄より御陳述被成度來ル十七日までに上京願度候。大兄も発起者の一人ニて斯る大事の時機ニ際遇せし事故小崎君も御察被下候事と信申候間何分よろしく。

別に小崎君ニハ書面不差上候間、前述の通り御傳へ被成下度

候。

要用而已

（明治卅年）三月十三日　　仁藏

麻生正藏兄

(14)

（前欠）

（マヽ）省雑誌」中ニ記事有見て申候。是れ大ニ天下ニ打出でたるの反響なるものなるが若し何か之ニ對し御考按もあらば御通知願度候。浮説云々は何をいひしものか或はキリスト教を傳播スルノ策略トカ其他山師仕事等のことならんと被存候が、吾人の意を明ニし可成同情を持たすべきや或ハ放擲しをく可きやと相考共何かよき方法ありや御相談申上候。

尚女子大學を同志社の如きものと同一視し大ニに気を揉むの姿なりやと相考申候故ニ「反響雑紙」記者も賛成者ニ加へてハ如何とも相考候。如何もの也ニや。

匆々不一

（明治卅年）五月三日　　成瀬仁藏

麻生正藏様

二白　「切り抜き」は次便に御返却を乞ふ。

(15)

（追記）

二白　原稿着候ハヽ端書ニて一寸事御通知被下度。

拜啓小生の原稿出來次第御廻はし被下度候。本日近衛公土方伯の筆記二通を御送り申上候間、土方伯の分ハ直ニ伯ニ御面會被下一度御見せの上ニて添作の上可成至急小生へ御廻はし願上候。又近衛公のは可成骨折て御添作願度候。少しく事実の例を御議論をふやし度希望致候。大隈伯のも矢張り今回御送り申す事に致候間、是又大ニ御添作成下度候。而して直に印刷ニかゝらせ度候間、御多忙中氣之毒ニ存候へ共大至急御着手被成下度奉願候。而して出來次第一ツ一ツ御返送被成下度候。

今度の名称ハ女子教育演説となさんかと思考中ニ御座候。如何。

要用而已

（明治卅年）六月三日　　仁藏

麻生兄

(16)

原稿御廻はし落手致候。

毎日新聞ハ思ふニ出さゞる可存候。就而ハ彼ノ論文をも今度出版のものへ加へて出さば如何かと存候。或ハ他ニ之ニ對する序文ヲ草しては如何トも相考申候。今日位置ト程度ニついてハ辯ずるの必要有之候樣相考申候。若し序文ニしても過日の分ニしても出スコトニ御同意ならば至急例の寫し御廻はし被下間敷や。何トナレバ毎日ニやりし分ハ戻り來ず。

『太陽』過日御持歸ニ相成候も至急御送附被下間敷也。

序文ヲ附スルヲ適當と思召ば例の論文を燒き直し被下度候。

本の題は『女子教談第二編』ト致しては如何。

御高見御通知願度候。

右要用而已

匆々

（明治卅年）六月六日　仁藏

麻生兄

(17)

松村其他へも大分面會致候が余ハ變りたる事も無之候。

扨て昨日教育報知記者ニ面會致候処、來月十九日頃ニ出ス號ハ三萬以上もすり全國の學校へ分配するよしに有之候。就てハ小生ニも何か女子教育ニ關し寄書せよと申候。また女子の友記者も同樣ニつき種々論文を要し候へは其邊ニつき愛兄も御考置き被下候。

女子の友主筆石川正作氏ハ日本女子大學の賛成員たるを承諾致候間御記入被下度候。

其内女子大學發起賛助員賛成員の名簿調製を要し候間其準備も御願申上候。

用事而已

匆々不一

（明治卅年）八月廿四日　仁藏

麻生君

二白　當地ハ非常ニ冷氣相催候が御地ハ如何。葉山ニ一泊せしが仲々凉しきよき處ニ御座候。

(18)

先日御申越の件拜承候。

夏の間ハ人を尋ぬるが誠ニ不便ニて手間が係り申候。例之宗教ト教育の關係の論文ハ萬人ニ誤解なき樣己の意を表明する事の實に困難ニ相感申候。また一方ニハ今暫く斯る論文を出スコトハ見合せニしてハ如何トモ相考申候。

御高見如何。

發起人等の姓名の入りたる趣旨書二三部御郵送被下度候。種々御報道申上度候へ共何れ九月十日頃ニハ歸阪の途ニつく可く筈。御面會之上可申上候。

（明治卅年）八月卅一日　　仁藏

麻生大兄

⑲

小生は伊藤侯と遇て大磯に（カ）寄り歸阪之途ニ着度と存候。委細ハ御面會之上可申述候。扨て小生ハ已ニ無一文ニ相成申候。就てハ御面倒乍ら金拾圓通運會社爲替ニて東京麹町区飯田（イイダ）町廿一番地兼重方成瀨万寿枝方へ御送り被下度此段奉願候。實ハ大ニ急ぎをる樣子なりし故直接御手數奉願候。

種々論文演說ニついてハ御考をき被下度候。兵庫縣教育大會ニ於てハ少シク運動致しては如何と相考申候。

用事而已

（明治卅年）九月三日　　仁藏

麻生兄

⑳

昨日は御邪魔仕候。大兄の洋行ニつき横井君の好意誠ニ難有存候。獨り大兄の爲めを計る而已ならず亦た將ニ設立せんとする女子大學の爲め考へ呉れられ候事、君の寛大なる親切心深く感謝する處ニ御座候。願くは小生よりも謝するとのこと横井君へ御通じ被下度候。

昨日御話の件ハ女子大學成立否な着手の上略々事緒ニつき候節は、有志者ニ計り何トカ君の御便宜を得度ものと存じまた出來得る事と相考申候。

扨て廣岡の次女つた子御地東三本木上の町柳原氏方井上秀子と同居致し京都府高等女學校ニ於て勉學罷在候が、今度御地ニ於て別ニ英學教師を求め通學致度（或ハ他ニ貳名も）、就而は愛兄に其周旋方及御依頼致候ニつき乍御面倒小生ニ代り適當之教師へ御紹介被下間敷や。願くは三本木ニ近き處ならば幸甚との事。又教師ハ男性ニても女性ニても外人ニても本邦人ニてもよろしきよしニ御座候。右の生徒ハ何れも初學のものニ有之候。御心當りあり次第右の仁御通知被成下度奉希候。而して萬書面ニて分り兼候節、東之三本木まで御足勞被下候へば難有存候。

右用事而已

匆々不一

（明治卅年）九月十六日　　仁藏

麻生兄

(21)

神戸に於て開會の準備ニつき中川君へも御依頼昨日曜日位ニ下神致し呉れられ候様書面をもて申遣し候へ共、今に何の返事も無之。尤も東京よりも未だ何の返事も無之候。確定六ケ敷かと存候へ共、實は愈々二日或ハ三日頃ニするとすれば場處の事印刷物の事案内の事等其ニ今日より準備ニ取かくるべきかと相考候。就而ハ若し中川君の御下神遅く相成候様の事なれば、小生は明日頃ニても出神致し其々掛合見度ものと存候。

御申越の文部省連の人も加へる事ハ至極上策と存候。小生も神戸ニ參り出席の人々を調べ其上ニて手順致度と存候が、中川君ニも意見御尋被下度候。

右至急中川君ニ御面會被成下度候。かつ御相談の上其模様直に御報道被成度此段御依頼申上候也。

匆々

司會の事も周旋の事も小生ニ代り御依頼被下度候也。

(明治卅年)九月廿七日　仁藏

拜

麻生兄

(22)

拜啓北畠氏先日來細君御病氣の爲め手引けず延引致居候。尤も尚ほ快きニはあらざるよしなるが余り延引致候故明廿七日（水曜日）夕方より中川君ト同伴訪問する事ニ約束致候間、大至急其儀中川君ニ御傳へ被下度候。而して明日午后第三時四十分の汽車ニて御地ヲ發し被成下度。然れば小生梅田ステーションまで出迎ヒ可申候。萬一其汽車ニ後れ玉ふ時は次の四時四十分の列車ニて御發し被下様御申傳被下度候。右中川君ニ於て故障なくは其儘ニ被成置度。若し差問有之候節は電報か或は至急郵便ニて御報道被成下度奉願候。

愛兄ニは明後日か或ハ明日中川君ト御同道ニて御來阪被下間敷や。或ハ大兄ニも明晩北畠氏を尋られてハ如何と存候。實ハ節期の払ヒも大分重なり居り候間、御出之節ハ帳簿並ニ會計箱御持參被成下度候。

願くは明日中川君と御同伴被成てハ如何。尤も御都合惡しく候へは明後日御來阪被下候てもよろしく候へ共、明日の方願はしく相考候。御出の節ハ尚ほ他の一件御依頼申上度候。即ち御地東三本木柳原邸内ニ土肥原京子住居致居候が、小生の冬羽織出來致候よしニつき一寸御立寄り右御受取御持參被下候へば難有

奉存候。

右要用而已

草々

（明治卅年）十月廿六日　仁藏　拜

麻生愛兄

(23)

拜啓今朝の端書御落手の事と存候（東三本木へ送りし件）扨て兼而及御依頼候若林の身元引受至急を要るとの事ニつき乍御面倒早速御調印御郵送被成下度此段偏ニ奉希候。

廣岡細君一寸歸阪被致又た間もなく出立九州へ向はれ候よしなるが此際中川君とも熟談を遂げ度候が明後八日月曜日午後ニても中川君ニ御來阪を煩はし度候が愛兄より一應都合御聞合せ御一報被成下度願上候。

草々

（明治卅年）十一月六日　仁藏

麻生兄

(24)

（追記）

時勢の惡しき爲め追々遷延し困難を増し天下に對し廣岡ニ對し土倉ニ對し發起人に對し學生に對し友人に對し萬人ニ對し氣の毒千萬……小生の責任のみ重し。

今事業成功し着々ハカドリヲラバ凡ての人ニ滿足を與へしならん。然レドモ之ニ反し困難ニ際遇せる際故――卽ち時の延びる爲めニ凡ての怨府（エン）トナレリ。嗚呼！

御書面難有奉存候（只今入手）。御申越之件承知致候。然るに先日杉江云々の事何處まで申上げしか覚え不申候へ共、小生のこと大兄ニ通せず遺憾ニ存候。新田君ハ先日來氏の望も有之かつ銀行ニ於ても大ニ用ゐる積り……小生は以前申述候通是非氏を要し候へ共……加之事業も未だ將來の見通し付かざる事に候故、一先ず銀行ニ行く事ニ決し學校ニ再ビ戻るや否やハ自然の成り行き任ス事ニ決し候。

（この一行注記）

新田君ヲ引擧る事ニは陰ニ種々盡力もせり。

然れば今小生が約を守るべきは杉江氏一人ニ御座候。――素より大學校の爲め辭職せしものニあらず――然る處小生ニ關スル世間の疑もあり、新田等の嫉妬もあり（彼一人ヲ用れば）廣岡

様の不信任あり……其後小生も種々輕率の点を見出し候事有之……杉江一人を最初ヨリ採用するハ如何やの疑有之候。

（注記）

杉江ト小生の關係――片山ト杉江ノ關係増田ノ申せし事　杉江の感情　廣岡トノ關係其他種々の事情有らんや。

……――素より用ゐんと約すれば望むらくは生涯續けんことを希望すれど不適任を見ても解職ス可らざるの道理は無之と存候。さればたとへ任職後と雖も其の任ニ適せざる時は不得止學校ハ解職スル事もあるべし――――萬一學校開校後ニ至り委員等ニ不同意ありて入ルゝ事六ケ敷場合は實に氣の毒と存候故、今日は新田君も前述之通りニ相成候故、創立も余り長引く故全體梅花女學校教員を一先づ解き今后は自然の結果ニ任すの意なりし。併し小生ハ上京後之ニ關してハ默スル決心ニて今日も横濱ニ參りても杉江氏ハ訪問不致る事に致候。

（注記）

此素より先日兄ニ申せし事杉江ニ申せしニせよ永久又は必ず杉江を用ゐぬといふ意味ニハ無之候。只増田等をあきらめしむるの一策又將來杉江をも失望（萬一の事なれど）させまいとの用心より出でしわけニ御座候。

小生が種々心ヲ痛むるは己れ自身の爲ニあらず。天下ニ對し發起人ニ對し申譯の立つ様誤解を與へぬ様痛くない腹ヲ誤認せられぬ様と苦心する處に御座候。實ハ小生ハ友人ニ對し忍びざる情は懷きをり候へ共…アゝ萬人ニ滿足を豫ふる事ハ難（かた）哉……委細は御目ニかゝり可申述候。

只今横濱より歸り十二時前（夜）ニ認め申候故御推量……誤解なき様願上候……。今日の電報ハ――君の論文ヲ五日〆切りの太陽ニ出さしめんト相考へ申上候。

明日は教育大會へ臨む考へ……。

伊藤、大隈、児島、近衛、諸公ニ面會致候。委細ハ御面會の上可申述候。

要用而已

草々

（明治卅年）十一月四日夜　　仁藏

麻生賢兄

(25)

貴書ありがたく存候。御申越の金圓ハ何トカ致し御送金可申上候。兄の論文ハ今度高橋五郎氏らの發刊――「天地人」といふ雜紙（マヽ）ニ掲載する事ニ相成申候。原稿ハ已ニ村井の手より高橋ニ渡り其より他ニ渡りかつ活字ニ相成候事故其儘ニ致をき申候。

例の一時の急を救ふ事ハ御互ニ英文の譯文を書き、又雑紙(マヽ)ニ投書報酬を受け幾分の補ヒニなす事ハ得策かト相考申候。されば大兄の將來の準備ニも可相成と存候。色々御相談も申上度候へ共何れ御面會の上……。小生ハ此冬ト正月の初ハ不在して御祝ヒハ止める事ニ致し、又青木様の拂ヒも一月ニ延ばし度と存候。

万寿枝の事も河村、服部、兼重、河□（以上二名万寿枝の親類）、網島、村井の人々ニ集會を乞ヒ……相談の上萬事を決定致申候。此件ニ關し毎度御配慮を煩はし奉謝候。

小生ハ日々多忙ニて其後毎夜十二時前ニ就眠せし事ハなきの有様ニ御座候。

匆々不一

（明治卅年）十月十四日　　仁藏拜

麻生愛兄

(26)

拜啓小生歸宅後直ニ流行感冒ニをかされ今ニ打臥しをり候へ共今日は大ニ宜敷、明日當りよりは外出も出來可申と存候。

扨て廣岡氏其他と相談の上大和へも向ふ事ト可相成相考候。然る處先日在京中山路某（元同志社出身ニて松方伯の世話ニて洋行し今勸業銀行ニあるよし）より土倉政子（此頃歸朝せし娘）を所望ニて小生より申込ミ呉れとの依頼を受けをり候が、實は小生は其婦人等更に不存申候。就而は愛兄御承知の事及ビ御友人より御聞調べの上御高見至急御通知被下間敷也。

右御依頼申上度如此ニ御座候。餘はお目にかゝり可申述候。

匆々不一

（明治卅一年頃カ）二月十五日　　仁藏拜

麻生愛兄

(27)

拜啓　先日中川君送別會々費並ニ今夜中村樓ニて夕食費用及今日小生の車代中川君ニ取替へ貰ひ居候間、乍御苦勞可成速ニ中川君御尋ね被下（遅くとも君出立までニは）右借用金愛兄より御渡しをき被下度願上候。されば其内御面會のせつ御返し可申候。

御依頼而已

（明治卅一年頃カ）二月十八日　　仁藏

麻生君

(28)

(追記)

中川君へよろしく御禮御申傳被下度願上候。

拜啓昨日は御世話ニ相成奉謝候。昨日も一寸及御依頼候通中川君ニ先日送別會之入費並ニ昨日の分御渡し被成下度。又昨日は餘りの降りニてツイ兄の傘借用宅まで使用致候。就而は甚だ乍失敬小生の傘多分内海知事の内Carの中ニ失念致候間、御序之せつ或ハ御運動のせつ一寸御立寄右兩處ニて御尋見被下間敷や。品は櫻木の柄と事(の脱カ)に御座候。Carの中の分は電氣會社の事務所ニて御尋願度、尤も十中八九ハ内海の内ニ有之る事と相考申候。而して萬一無之せつは一圓二三十錢の傘御請求被成下次ニ小生出京之時まで其のもの御使用被成下度候。

愛兄ニは御地公私立諸學校の視察被成下雙方の利害得失御調べ被下間敷候や。

右御依頼申上度如此ニ御座候。

匆々

(明治卅一年頃カ)二月十九日

仁藏

拜

麻生兄

(29)

拜復御尋の技師之件廣岡氏へ照會致候處、其返事に廣岡氏より住友の方へ掛合ヒ見候處、田邊支配人凡ての帳簿(人名)をも調へ候へ共、斯る人更ニ無之而已ならず以前ニもなきよしニ御座候。又住友氏の方も當時は金銀山へハ更ニ手出せぬとの事ニ有之候。廣岡の方も炭山は分り候も金山の方ハ凡て白徒(シロウト)ニて先日御話之事は御斷り申し呉れとの事ニ御座候。

先は右御答而已。

草々

(明治卅一年頃カ)二月廿日

仁藏

拜

正藏兄

二白　察するニ御申越之技師六十圓ニて住友家ニをる云々は全く偽の様被考申候。

(30)

拜啓第五中學校の方は少しく遲かりし爲め出來不申候(尤も第二のロハあれど低過ぎていかぬ)。中川の方ニも依頼は出しをき候。種々申上度候へ共何れ近日出京可致と存候間、其せつ土倉君は三四日の後ニハ來阪かと待ちをり申候。

先日來下女ハ疾み客ハあり困り申候。
岡山ニ於る演說ニつき善きSuggestionも有之候はゞ御報道被下度候。

草々不一

（明治卅一年頃カ）
廿八日

仁藏

麻生兄

## ㈢ 服部他之助宛

拜啓明日講義の時間漸く變更の都合相つき六時半頃には參上可致ニ付左樣御承知被下度候。
餘ハそのせつに

匆々不一

（年不詳）
七月四日

成瀨

服部樣

## ㈣ 光本光次郎宛

拜啓愈々御清穆賀上候。先達は罷出種々御懇切なる御待遇に接し特に新庄校より多數參上のものに對し一々御厚遇被成下感佩の至ニ存候。又夜分深更御面倒をかけ誠に不相濟候。
不取敢御禮まで

匆々

（年不詳）
十一月十二日

成瀨仁藏

光本大人

机下

## ㈤ 富山虎三郎宛

拜復御地滯在中は種々御厚遇を蒙り難有奉謝候。漸く昨朝歸宅早速澁澤森村兩氏打合せ愈々來ル四日當地出發致し御地へハ來ル八日着の豫定に候。櫻井一作君へは早速（昨日）書面をもて尙ほ十分御盡力を依賴致し候間、尙尊君よりも御話し被下度御願申上候。鎌富氏より御承知の旨來電有之。御地他の諸君へもよろしく御傳被下度候。

匆々敬具

（年不詳）
七月廿九日

成瀨仁藏

富山虎三郎殿

## ㈥ 坂部靜子宛

近頃の御感想數年の深き御經驗の御告白に接し大ニ感動致候。益々信念を養はれ生涯の御使命を盡され天意を成就被為候樣切望ニ不耐候。其内下阪のせつ御目にかゝり種々御話申上度希望致候。

不取敢御返事まで

匆々不一

（年不詳）五月廿一日　成瀨

坂部靜子樣

## (七) 平井たか宛

思ひ掛けず御手紙ニ接し昔の事思ひ出で懷かしく拜見致候。先以て御機嫌よく多くの御子方を御育て被成御幸福ニ御暮し被成候段、欣賀の至りニ不堪候。

扨目下櫻井高等女學校御在學中の御令孃成績も優れられ特待生となられ候由ニて來年御卒業の上ハ當校入学の御希望を以て種々御相談ニ預り委細承知致候。其とに自分ニ取りてハ孫娘の入學せらるゝ感有之來年を樂しみに致候。

學科ニ就てハ普通の家庭として高女の教育ニてハ不足なれハ今一層高等の學藝を修め人格を修養せんとの目的より云へは家政學部が最も適當と存候。又教員として立つ目的ニは師範家政學部ニ御入學被成候。成績佳良の場合ニハ家事科教員の資格を與へられ申可。其他御本人の性質趣味等ニてハ國文學部なり英文學部なり御撰定被成候事を得べくと存候。何れの學部ニても成績優秀ならハ高女四ケ年を卒業せる上ハ第一學年ニ無試驗（英文學部のみハ英語の試驗を致す）ニて入學を許可致す事ニ相成居候。尚詳しくハ□ニて御送り申上候規則ニて御承知被下度候。

先ハ不取敢御返事まで

時下折角御自愛の程祈上候。

早々不備

（大正七年）四月弐八日　成瀨仁藏

平井たか樣

## (八) 櫻楓館一同宛

漸、生本日ヒラデルヒヤ地方を廻り當地卽米國に於る最後の豫定地へ無事到着致候。種々御報告申上度事は澤山有之候へ共、何分當國に於る人々へ義理を欠がぬ位の事も六ケ敷次第、何れ歸朝の上に可致候。

愈々來る廿七日午前一時にはN・Y・出帆英國へ向ひ可申候。
御自愛御盡瘁希望に不堪候。

成瀬生

大正元十一月十九日夜二時認

櫻楓館御中

## (九) 玉木なお・正田淑宛

明日ハ神戸、須磨へ廻はり明後日は京都、其より直ニ歸途ニ就き可申。就而ハ書狀は凡て其儘ニ留めをき被下度候。
先日正田さんニ二階より下ニお運ビ貰ひし（押入レ間）答案の内結婚ニ關スル分御調べをき、小生が一見して内容分り安き樣御手傳出來候はゞ大ニ助り可申と存候。若し御ひまもあり方法も分り候はゞよろしく願度候。大體は正田さんへ申をきし樣に考候。

（年月不詳）十八日夜

仁

玉木直子
正田淑子　樣

## (十) 藤原千代宛

御懇切なる御書面ニより大ニ慰藉せられかつ當時吾校の全體の傾向御報ニより被察大ニ安心仕候。其後も必ず貴姉らより熱心任じて御盡し被下る事と信じ大ニ心を休め且つ今は病魔と戰ふこそ吾職務なれと信じ大ニ勇氣を出し候處、病軍も辟易せしものと見え大ニ快よく相感申候。御申越の通先日來明月ト云ひ大海トイヒ麗山といひ悉く吾にインスピレーションを與えざるといふ事なし……所感筆紙の盡す處ニあらず御察被下度候。日々山ニ海ニ古蹟ニ運動怠りなく夜は安眠を務め居候。食慾體重日々相增し候樣におぼへ候へ共、安眠の處今ニ勝利得難く候。之は十數年過疲の結果と存候。追々と回復スルの外無之存候。併し注意さへすれば決して心配は無之候。小生の事ニは御放念被下度候。願くは今日の御決心をもて永久ニ御奮進の程希望不耐候。他をも御奬勵かつ追々と全軍を動し度ものに御座候。
尙立際も時間表等種々御面倒相かけ奉謝候。
不取敢御返事而已。

匆々

（年不詳）十月七日

成瀬

藤原千代子樣

## (十) 藤原千代・手塚かね宛

其後は少しは御休養出来候事と御察申上候。先日平野氏より申上候輕井澤ホテルは何と返事致候也。一寸御通知被下度願上候。當地は未だむし暑く只今小生の室の温度は九十度ニ有之候。折角御靜養將來の御準備大と存候。不相變多忙ニ付右用事而已。

匆々

(年不詳)
八月十三日　　成瀨

藤原様

手塚様

他の諸子へよろしく御傳へ被下度候。

## (十一) 仁科節宛

(1)

先日（本年ニ入り）「大國民」の或ハ他の雜紙(マヽ)ニ掲載せし小生の話有之ニ付御手元へ御廻はしせしかと相考候。實は其話入用ニ付若し御手元ニ有之候はゞ當方へ御廻し被下度候。

(年不詳)
四月廿二日　　成瀨

仁科様

(2)

ヴァンダイクの詩集入用ニ候。御返し被下度候。

(年月日不詳)　　成瀨

仁科様

(3)

其後は如何。

病氣の原因ハ只疲勞か或神經衰弱か又は胃弱ニ候也。

病性ニより可成早輕井澤へ行かるゝ事大切と存候。兎も角委しき事御知らせ被下度又次の一信其他の希□も有之候間、御自身の御考も承度候。

(年月日不詳)　　成瀨

仁科様

(4)

先日御渡致し候「ノート」（各級とも）本日入用ニ相成候。御返し被下度候。

(年月不詳)
一日　　成瀨

仁科様

（家庭之友）の宮田脩氏の女子大學生ニ送るの論文御一読被成候てハ如何。

(5)

度々催促致し誠ニ気の毒ニ存候へ共、小生も約束致し候責任有之候へば何とか決心致さざれば面目に關し候。就而は十分お考えのことと存じ候故どうしても六ケ敷御感被候へば何とか他ニ方法を付けねばならずと存じ候。無御腹藏御心中御打開け御相談被成下（小生へ）度希望致候。

御熟考の上至急御來談有之度候。

（年月不詳）
五日

成瀬

仁科様

## ㈡ 上代たの宛

(1)

大正元年八月九日　地洋丸

成瀬仁藏

上代たの子様

昨日より御調へを願ひし日本宗教史を拜見致候。仲々御骨折りなりしを感申候。四日斗風邪□致し仕事大ニ遅延致し昨日よりは力を入れをり候へ共、知人多く思ふ程ニハ集中六ヶ敷候。

船中之氣候は思ひしより涼しく健康ハ日々回復致をり候。

種々感じしこと認め度し□　何分時間乏しく、御挨拶のみ。

匆々

(2)

御壯健ニ御勉學御悦申上候。當方無事不相變多忙ニ働居候。鈴村氏不宜誠ニ心配ニ有之候。併手術は上出來ニて一先國元へ歸國靜養の筈に御座候。吾邦婦人會は益々素養深き人格を要し申候。折角修養を被積將來十分御働被下度切望ニ不耐候。十二回生及本年三年生も徹底的ニ向上致居候。大體の様子は週報等ニて御察被下事と存し候。

匆々不一

（大正四年）
五月廿三日

成瀬

上代様

(3)

先日は御書面ニ接し拜見直ニ鈴村氏へ送附致候。御近況相分大ニ悦申候。折角御奮進一日も早く御歸朝母校の爲御盡し被下度候。小生は無事併不相變多忙を極め御返事も大に遲引致候。只今大阪ニ在今朝の寸暇を得之書相認め申候。母校の創立記念十五年ニ相當來る廿日記念式擧行致候。記念研究室ハ已ニ金三萬三千圓相集り近く着手の筈ニ御座候。

餘は後便ニ。

匆々不一

（大正五年）四月七日　成瀨

上代たの子様

## ㈣ 荒川かず宛

(1)

早速御返事可差上候處先日來學制の改善の事其他一時ニ多事輻輳致し不心ずも延引と相成不相濟候。今回の御地音樂會も貴支部の御熱心と御勇氣ニより意外の効績を御収誠に悦申上候。之を基と被爲今後着々各方面ニ發展せられんことを切ニ希望致候。小生次回下向のせつは是非御地へも立寄度希望ニ不耐候。不取敢御返事まで。

匆々不一

（大正五年）十二月十九日　成瀨

荒川かず子様

各會員方ニよろしく御傳被下度候。

(2)

熱烈なる御書面に接し近頃之深刻なる經驗に共鳴致し候。其靈動の大元に感應出來申候。日夜其靈交に離れざる心掛けこそ、永生之源泉に御座候。其内直接御目にかゝり新なる經驗承り度候。實は近々大阪へ參る節御地に立寄る心積之處不得止重要事件起り今回は中止致候。不取敢御返事まで。

大正七年五月十二日

## ㈤ 平野はま・都丸・月田カン宛

兩度の御通知ニより山上の空氣相通し深く悦申候。小生事ハ御地へ參る前に伊香保並ニ大阪へ參る用事出來筈の處これさへ他の用事ニ忙られ延引致居候次第、就而ハ今月中ニ一寸ニても御地へ向ふ事六ヶ敷相考候。先便平のさんより御通知有之通今年ハ御指導よろしきを得て十分自動的ニ高調ニ達せられ候よし、

なれば小生が無理ニ都合つけ參る必要は無之と存じ居候。
貳年生諸子へ其旨よろしく御傳被下度候。
種々申上度事も有之候へ共寸書認候時すら見出兼候間諒察を乞ふ。

匆々不一

（年月不詳）
廿八日　成瀬

平野様
都丸様
月田様

## ㈥　井上秀宛

(1)

玉木姉ニつき委しく御通知ありがたく奉存候。
音樂よいとならば幼稚園ハ如何。幼稚園ならば余り深き學問も音樂も要せずして常に無邪氣の小兒と遊ぶ事故快樂ありて運動にもなるべきか……
或は植木屋か或は兄の相談相手になり家の商業を助け金儲をなし何か社會の爲家の爲め兄弟姉妹らの教育の爲めニ盡すかの一を採るべきかと被考申候。其□ニて御忠言御願候。
雅二君の卒業式ニは相臨み申候。氏ニも度々面會相談致候へ共何れ御面會之せつ委曲可申述候。
御身益々御壯健之よし何よりの事ニ被存候。折角保養專一ニ被存候。
三四日前再ビ大山夫人を訪ひしも不快とかニて面會被得ざりし故書面をもて例の菊重之事大略申残をき申候。
小生の事業の方も着々歩を進め居申候。
種々申上度候へ共今夜も更深にかつ明朝は早く出掛けざるを得ず。重（カ）て後便ニ。
時々御報返被下度奉待候。

（明治三十二年七月）
十七日　早々（マヽ）　不一

秀子様　仁藏

(2)

今下阪の途中相認め申候。
小生事又々急ニ用事出來今晩二時の汽車ニて下阪此日午前ニ京都へ着、明後日者大阪ニ在り、其より一寸大和へ參り可成速ニ當地へ歸るの考ニ有之候。
就而ハ何か御用あらば大阪土佐堀裏町池田屋か京都横田様へ能在候間御通知有之度候。

明三日ハ京、四日ハ大阪、五日ハ大和、其タハ大阪、六日ハ神戸か京かニ在るならん。七日頃ニは出發して歸京するならんと相考申候。

種々申上度事も有之候共、今日も出發前非常に取込ミ所用事

草々

仁藏

（明治三十二年）八（九）月二日

井上秀子様

(3)

小生事今朝歸京致候。

御病人あるよし御心勞深く御察申上候。其の御方は誰なるや、又其後の御容體如何に候也御伺候。

御良人様ニは已ニ御歸京相成候也。菊重も國元ニ病人あルとの事ニ候。廣岡夫人ニは二十日頃來京之筈ニ御座候。

將來御進行の御方針大賛成ニ御座候。

折角御自愛一日の光陰も空く去るを免し思（カ）ふ勿なからんことを。

日々御多忙案申上候。併し是れ世の常態ニして、亦吾人の藥……

草々不一

仁藏拜

（明治三十二年）九月十一日

井上秀子様

(4)

其後は如何、一筆申上候。

小生ハ不相變獨居晝間は例の「ば阿―」來り留守致し呉れ候。夜間は過日二日間河岸來り呉れしも此頃ハ又止めニ致申候。

今日菊重ニ尋申候。君の事尋問致申せしが小生は未だ御面會不尋る樣ニ申をき候。卽ち君の御歸鄕後ハまだ君ニ御面會せざりし樣申をきたり。是れ京都ニ在られぬ態故なり。

此頃京都へ來らるゝかも知れずと申をき候。何故乎ト問キシ故何か必要あるらし、後ニ井上氏より申スベシと答へをきし故、左樣御承知願ヒ候。

牧瀨孝子昨日小生を訪問せられしも不在なりし故小生よりも其内一度尋度と存候。樺氏も其内尋度存候。

御賢母樣は未だ御出なきや、又何日頃に保養院へ歸り玉ふ也御一報否時々御通知被下度希望致候。

來ル七日ニハ可相成ハ京都へ參度存候共、多分參り兼ると相

考候。（已に斷りは出せしも）

廣岡夫人ニは來月十日頃來京せらると申上候。

今も夜十二時頃

草々不一

（年月不詳）
卅日　仁藏

秀子様

(5)

先日御尋申上候處、今ニ御返事無之其後如何被過候也。

大至急ニ一報煩存候。

又種々寮舍之事ニ關しても御相談（開校前）有之候間、是非々々五日中ニは御上京被成下度。

匆々不一

（明治三十四年八月）
卅日　仁藏

秀子様

(6)

未だ御返信ニ接せず候へ共、定めて御無事御歸省之事と存候。御出立の當日者當地ハ寒を催し候ひしが、汽車中風等の御障りハなかりしや、御尋申上候。廣岡の方ハ如何の都合ニて有之候也。當地ハ今日まで毎日雪と雨ニて誠ニうとうしく氣分も晴れ不申候。今日ハ大分風も具りし故或ハ晴ニ近きかと被感申候。

○群間（マヽ）朝集の中二三册不足を見しをりしが、［　　］御通知を乞ふ。

折角御保養專一ニ存候。身體ニも心靈ニも十分の貯蓄をも成、將來の憤戰之御準備必要之事被存候。

小生は日々市中を駈廻りをり候。

佐野女も十分養生法が分り又其習慣のつく様御注意大切と存候。

雅二君の學資ニ付ても十分御相談ありて將來空算ニならぬよう確實な事ニも成る様希望致し候。將來雅二君の爲にも、實益を重ぜられん事尤も肝要に被存候。

當世の流行も想像ニのみ奔るの風あるは憂ふべき事ニ御座候。而して人の約束も言も當ニならぬとは　ア丶。

勿々

仁

（明治三十五年七月）
十九日

秀子様

(7)

御書面難有拜見致申候。其後御壯健之事祝申候。
御尋之件ニ就而は御歸京之上委細可申述候。仲々手紙ニては十分ニ意を盡す能はず候。
先日も御咄申上候通、習慣といふものハ實ニ恐るべきものニて諺ニも三つ子の精神百までとか、又雀百まで躍ハ忘れんとか申……午后學生らは九州まで又ハ北海道まで毎年歸省致候が、各々少々の困難な場合ニ逢申候て、宿り又ハ人の親切な言ニ乘る樣な事阿るとすれば、實に危險な事ニ御座候。（當初ニ惡習のさくる事實ニ大切。）先日退校を命ぜし□□の如きも人の親切を眞ニ受け終ニは其のわなニかゝり申候。先日ピストルで自殺を遂げし□□も方々他の内ニ危介トなり輕々しく飛廻り、小學教員抔して田舍ニ在りしが終ニ迷子トハ成れり。□の如きも或ハ□木氏へ行き或ハ崋山の處ニウロツキ其果ハ狂氣せり。（今日の婦人たちハ其の危險タルコト見エヌニハ困ル）
西洋の風ニても容易のままニてハ人ヲ己の内ニ容らしめず、又人の内ニ容らず、是ハ實ニ一大事件トナせり。特に婦人の身に取りてハ然り——今日日本ハ過渡の時代ニて舊習ハ破れ新風未だ成形するニ至らず。故ニ思慮ニ乏しき、常識ニ缺け、意志の弱き人々は如何ニして將來之を保護すべき一大問題と存候。願くは此問題ニ關して十分御研究あつて多の學生ニ方針を示すの任を御察し下る樣希望ニ不耐□。
御地も雨天ニて御困候よし、當地も今朝まで實ニ不順ニて小生如きも今朝ハハヤ倒レル可と疑ヒシ程苦しかりしが、今夕ニ至り大分凌きよくも成り又氣分も晴れし心地致候。
日々募集之爲駈走りをり有。小生も倒れて後止の覺悟ニ御座候。
十分夏中御保養增々健全なる身體をもて……犧牲的精神をもて……萬軍を破り……二千萬の同胞姉妹を興すまで……大ニ任じて進み玉へかし。
尙御申上度もあれど已ニ夜深く十二時を書く。然レハ後便ニ。

草々

仁藏

秀子樣

（明治三十五年）七月廿四日

(8)

井上秀子樣

（明治三十七年）八月十日午後認

成瀨より

大阪より御書面並ニ御地よりの簡書正ニ落手致候。

小生事御出發際間より腸カタールと相成四五日病床ニ打臥をり候へ共（一時ハ赤りの如き有様なりき）幸ニ早く全快致し今日より車ニて外出致し位ニ之有間、御安意下被候。

餘り無理ハ却て損と相成候間、思切て明後十一日より二週間輕井澤三井別荘へ避暑仕ル考ニ御在候。其積ニて御書面御差出被下度候。○今度の週報ヘハ可成早く原稿廻はしたく存じ候。○次のノンヴアーは「女子高等教（育脱）」てふ題ニコンセントレートスル考ニ御座候。米國の有名の女子大學歴史等も簡單ニ書かしむるはづ――家庭教育又其次ニ致スナラン。○非常之時速なる故、一日も無益ニ費ぬ様御配意大切ニ存候。大阪抔でも早くキり上げ被成候事大切存候。○吉見キヨ子ハ内の事情之爲め他ヘ奉職の必要あるよし御周旋を願ふ。○前川明きは支那か朝鮮ヘ渡來旨申來候。○ホームジョーナル一寸開見候へ共郵送せしむべく候。○内の留守ハ平のはま子と雛田千尋子兩人ニ依頼致候。○下婢ハ今ニ適當のもの無之候。服部よりのは今ニ來らず候。○其他ハ異狀無之候。○種々申上度有之候所ろ今夜も深更。餘ハ後便ニ。

匆々

Late as it was, however, the Japanese Emperor, having appreciated the love and interest of Dr. Geene for Japan, and his earnest endeavour for the promotion of peace and mutual understanding between America and Japan, did acknowledge him to be a benefactor of the country. His Majesty decorated him with the Third Order of the Treasure.

The congratulatory meeting, held by the Association Concordia in Dr. Greene's honor, was the last public meeting, I presume, that he had ever attended. He seemed to be happy and well pleased to be thus remembered. But he was not impulsive nor emotional. So silently had he given the best of his personality to his beloved Japan, and now so quietly did he receive what she had to offer him in gratitude. This was the true personality of Dr. Greene, who represented true American citizenship.

The most important and the lasting work in the closing period of his life, I believe, was his kindness in helping the establishment of the Association Concordia, and the construction of the International Institute, which Dr. Maccauley had already mentioned.

It was when the California-problems were most disturbing, that I met him, one day, on his way to the Department of the Foreign Affairs. He looked rather tired, but very grave. He was going there, he said, to consult with the offecials about the momentous questions of the two nations—the questions engrossing his soul. He had been thus anxiously thinking and planning for Japan all the time, but he did in such a quiet way that even his near friends suspected not that his heart and mind had always thus been occupied. Again this was most characteristic of Dr. Greene.

This meeting in the street was our last meeting. That tall graceful figure, those peculiarly Japanese knight—like features, illumined by the serene and spiritual light from within, crowned with the venerable snowy white hair—these have left upon my memory a never-to-be-forgotten impression.

At the end of forty-four years in a foreign land, the time has come for that beautifully ripened life—ripened in the midst of discouragements and hardships —just to drop into the depth of the Eternal Stream of Life—leaving his bereaved dear ones lamenting for their great loss, but rejoicing in the rich heritage of his noble, self-sacrificing, and most devoted life—so quietly and peacefully, that ere his friends had realized that he was upon the threshhold of Eternity, he had passed away. To him it was only the continuation of the life which he had so nobly begun here.

he spent a year or more with my brother but subsequently lived in the family of my brother-in-law, L. H. Boutell, in Evanston, Ill."

It was during this period I believe that Mr. Sawayama met Rev. H. H. Leavitt in Evanston, and received from his interview the principle of self support of the Christian Church. This principle became another very important element of his character. From it grew his ideal scheme for missions in Japan. Mr. Sawayama's naturally enthusiastic and spiritual nature, in such a favorable environment, had developed for itself a rare Christ-like character.

On his return from America, he was tempted by high officials, with honorable positions and good salaries, to enter the government service. But nothing could swerve him, from that supreme purpose of life work. He had consecrated every thing for the direct preaching of Christianity with St. Paul, as his model. Instead of gaining a large amount of money from the government, he deemed it his honor and happiness to care for a little band of eleven followers of Christ, and to receive only seven yen a month, the precious thank-offering, freely given him out of the poverty of his fellow Christians; when the feeble condition of his delicate health had already begun an incessant demand for ease and comfort.

Pages might be filled with accounts of his high ideals and noble deeds, but this is not the place to portray his character. Suffice it to say, that thus his short yet beautiful devoted life was sacrificed for the building up of the Spiritual Kingdom in Japan.

The first instrument which was used to mould or develop Mr. Sawayama was Dr. Greene. Through his noble, appreciative, considerate, and genial personality, this youth, who was at first only curious to know the foreigner, eager to learn mere English, was drawn toward the central source of Light and Life. And then too by Dr. Greene's wise guidance and kind help, "this half educated Japanese" was led to the most desirable place in which he might labour.

Mrs. M. C. Wise, who was his instructer at Evanston, says in the Pacific Advocate:—

"The good man (Dr. Greene) wrote to his friends in America and secured, in the family of his own brother, a home for the youth. All was directed by the Divine hand. His home was in Evanston, Ill., the seat of the Northwestern University and Garret Biblical Institute. Where could there be a more fitting home for such a mind and heart?"

Dr. Greene, Rev. Leavitt, and Mr. Sawayama! those hidden movers of the deep course of Japanese progress! Though their great merits and values have long been unrecognized and forgotten, they were satisfied to be the nameless heroes, serving their cause with amiable and tranquil lives.

"Full many a gem of purest ray serene,
The dark, unfathomed caves of ocean bear;
Full many a flower is born to blush unseen,
And wast its sweetness on the desert air."

# THE BEGINNING AND END OF THE NOBLE WORK OF DR. GREENE IN JAPAN

With the opening of the long closed doors of Japan, the high tide of Western civilization came flooding into every creek and bay. There appeared then two distinguished characters—not so conspicuous to the eyes of the world, but most essential for the future destiny of the nation.

Rev. Dr. Niishima and Rev. Paul Sawayama were the two heroes. Both died on the spiritual battle field, fighting the good fight. Rev. Paul Sawayama, having laid the corner stone of the Independent Christian Church, the Japanese people respect and love him as the Father of their Faith. He, having received a Christian education in America, believed himself to be the chosen vessel of God, to be used for introducing to, and interpreting for Japan the true spirit of the Occidental civilization. This new civilization was so entirely different from the Oriental culture and refinement, that the people were as if confronted by an enigma. Had there been no wise spiritual leaders at the outset, where Japan has drifted to, no body could tell.

But who was this Paul Sawayama, the young enthusiast of the Pauline Faith? What had he to do with our lamented friend? Let Dr. Greene himself tell us an anecdote of this noble youth, and of his relation to Mr. Sawayama.

"In the spring of 1870 (Meiji Sannen) two of the retainers of the inkyo Daimyo of Choshu were introduced to me by the United Stated Consul at Kobe. They had been sent to Kobe to acquaint themselves with western habits of life that they might be prepared for responsible positions in the France's household... One day, these gentlemen asked to be allowed to bring with them a son of their "Master", Sawayama by name, who wished very much to learn English..... The young man was brought to our house and introduced to us. He presented very striking appearence..... He took up the study of English with much earnestness and made rapid progress, but he was not satisfied. He thought that if he could spend more time in the family he might familialize his ear with English conversation, and so asked to be allowed to spend the day in my study. We had already attached to him and readily gave our consent. He used to come every day at about seven in the morning and remain until after four in the afternoon. He was diligent with his books and most careful to avoid causing any inconvenience to our household—indeed he was always ready with his offers of help when there seemed any chance of his service to us. This practice he kept up nearly a year..... Sawayama early formed the purpose to go to America, and at my suggestion, an older brother of mine arranged to provide a place where he could earn enough to support himself while studying..... In America

well. In particular, the world-wide work of Christian missions, the comparative study of religions, morals, and literature, as well as the development of science, are daily stimulating intellectual activity and setting in motion moral forces among the nations on every side. And as Western civilization, the leading factor in these world movements, has behind it the culture and traditions of Greece and Rome, so the civilization of the East has the culture and ideas of Hindus and Chinese, running back for thousands of years, a civilization and an inheritance which cannot be readily changed. Furthermore, there must be considered the commercial and industrial rivalries and the frictions growing out of the problems of immigration and colonization. Unhappily these various causes of irritation too often lead to an undue emphasis upon national and racial differences, and so endanger the peace and progress of the world. It is a matter of vital importance, therefore, to foster mutual sympathy and the sense of common interest among nations, and especially between the peoples of the East and of the West. With this end in view most earnest effort must be made to secure on the part of each, of the East as well as of the West, a better understanding of the faith and of the ideals of the other. Although in its more superficial aspects the intercourse between the East and the West is growing increasingly intimate and their scientific interests are becoming wider, there is still a sad failure on each side to appreciate the deeper things of the spirit which underlie the life of the other. Without question, the removal of causes of irritation as regards political and commercial affairs is an imperative duty. But the promotion of a better understanding between the East and the West regarding matters of faith and ideals, and the creation of a reciprocal sympathy in relation to the deeper problems of the spirit, are matters of no less urgency if we would lay secure foundations for international peace and good will.

In short, the purpose of the Association is to promote the progress of civilization by international cooperation, with special reference to the solution of the various intellectual problems with which civilization is confronted. Those who are in sympathy with this programme, be they educators, statesmen, or men of affairs, are invited to join with us, each bringing to the solution of our common problems such contributions as his special experience and viewpoint may enable him to contribute.

"INTERNATIONAL CONCILIATION"

the Concordia and Peace movements by pointing out that the former deals mainly with the spiritual side of human life, while the latter deals mainly with the material side. I have come to the conclusion that the Concordia movement cannot achieve its ends without a wide understanding of different religious aspirations and different national characteristics. The material from which a universal and all-comprehending theory of life can be constructed has to be sought all the world over, and for that purpose it is necessary that Concordia should be promoted in different countries by different peoples having the same object in view. That is the reason why I have laid my suggestions before leading thinkers here about the organization of such an association.

## AMERICA AND JAPAN.

I have started on a tour around the world with the object of visiting all civilized countries with the proposal for the organization of the Concordia movement, because its efficiency depends largely upon the support and coöperation it obtains from the leaders of thought of different countries. But I am firmly convinced that the foundation for such a world-wide coöperation must be laid in America and Japan. America represents an advanced type of Western civilization and Japan occupies a similar position with regard to Eastern civilization. The usefulness of the Concordia movement will be most effectively demonstrated by placing these two types of civilization side by side, and by finding out the points of harmony and mutual understanding between the two. The trend of world affairs in the present century also points to the advisability of promoting such endeavor with vigor and sincerity. The Pacific is the place where the East meets the West politically and commercially. The awakening of China and the opening of Panama can be regarded as a prelude to the great drama that will be enacted there in the years shortly to come. The world is wondering whether it will be a friendly reunion or hostile encounter. It seems to me to be of the utmost importance that we prepare for such a meeting with a mutual and friendly understanding of thoughts and ideals prevailing on both sides of the Pacific Ocean. If we could succeed in establishing a spiritual union of the East and West, then every other thing will come in harmony by itself. This is my reason for attaching special importance to the organization of an Association Concordia in America, without whose coöperation the Japanese Association will find it difficult to achieve its original object.

## ASSOCIATION CONCORDIA OF JAPAN.

The Association Concordia of Japan was duly organized in June, 1912, and issued a prospectus, saying among other things:

The civilization of this twentieth century is breaking down the barriers of race and nationality and is transforming the world into one great corporation, not merely in the realm of commerce and industry, but in that of the intellect as

## THE CONCORDIA MOVEMENT IN JAPAN.

The Concordia movement has been started by leading men in Japan, with a view to finding common grounds of harmony and sympathy between different religions, races and nations and ultimately to the making of concerted efforts in the promotion of the spiritual uplift and peaceful coöperation of all branches of mankind. I must admit that such a movement is of particular importance to the Japanese themselves, because Japan has met with so many difficult and complicated problems concerning her national life which promise no ready solution. The greatest difficulty lies in the discord between the old and new ideas and conditions, a discord which manifests itself in a wavering faith in the traditional moral ideals on one hand, and the ever-increasing influence of the dazzling Western civilization on the other. At the same time, I believe that a movement with such an aim toward mutual understanding among different peoples of the world is not only beneficial but highly important to the welfare of mankind.

Since I came to America, two months ago, I have been convinced that this view of the Concordia movement is supported by many leaders of thought in America, and I believe that the time is ripe for translating the movement into some form of tangible organization in this country.

## CONCORDIA AND THE PEACE MOVEMENT.

It has been suggested that Concordia be made a branch of the peace movement, or of some other similar enterprise. In my opinion, however, an independent organization is required for the successful carrying out of the object of the Concordia movement. In the first place, it has more of the nature of a spiritual movement, while the latter, so far as I understand it, busies itself mainly with questions of the political and economical relations of different nations, thus concerning itself with the more material side of national life. The Concordia movement, on the other hand, was first promoted in Japan as a protest against the excessive materialism to which the Japanese people seemed to be inclined since their coming into contact with Western civilization. The first object of the movement was to find a common ethical motive amid the chaos of the many different religions that have come to be introduced in Japan. This desire necessitated the attempt to promote a mutual understanding between these religions, and afterwards we came to think that the movement would be assisted by a better understanding of different racial ideals and different national aspirations. The Concordia movement is, therefore, considered of vital importance in strengthening the moral power of a nation, and its usefulness will be decidedly increased by the coöperation of other nations. Though such a movement is emphatically required for the welfare of the Japanese people, still I may say that it cannot but have beneficial influence even on the American people in view of the influence of commercialism in this country. In short, I may sum up the difference between

# THE CONCORDIA MOVEMENT

The Concordia movement is founded upon the belief, first, that different religions, different creeds and different ethical teachings, though conflicting in minor points, are similar to one another in essential points, such as seeking after truth and higher spiritual life; secondly, that though mankind is divided into different races, still there is a common ground upon which each race can understand and sympathize with the characteristics of others; thirdly, though the nations of the world to-day seem to have conflicting interests on various problems, they can find, if they try to understand one another thoroughly, a way by which each nation might promote its welfare and prosperity without coming to actual clash with others; fourthly, it is desirable to infuse spiritual or ethical elements in the fundamental principles regulating social intercourse, as well as interclass and international relations, to take the place of materialistic considerations. Such considerations have unfortunately characterized the peace movement more than is altogether desirable.

Starting with these ideals, we have sounded the opinion of leading men in Japan, statesmen, business men, scholars, religious teachers, and leaders of thought, and found them heartily in accord with our views. The first meeting of those supporting the movement was held in Tokio in June, 1912, and an organization was formed under the name of Association Concordia. I had long entertained the view that it would be better for human happiness if a mutual understanding could be established as regards the various moral and religious teachings existing in the East and West. Through such an understanding, an essential point, or points, of concord could be found and given to the people as a basis for their moral teaching. It will be seen at once that such a movement would be for the benefit of the peace of the world and of friendly relations among different nations.

## ARE RELIGIONS FUNDAMENTALLY DIFFERENT?

Some people have objected that certain religions have fundamental characteristics and that they can never come to anything like concord. This view, however, does not seem to be correct, for if the religious aspirations of different races were hopelessly incompatible how is it possible that missionary work could be carried on with any hope of success? Concordia is an alliance of religions against extreme materialism. The emotional fire that mere ethical teachings lack will be abundant in the Concordia, which derives its strength from that religious aspiration which is inborn to all races.

## IDEALS.

The ideal qualities which Japanese women have striven to attain are modesty, dutifulness, and devotion. They would serve rather than demand, sacrifice rather than quarrel. It is a rare matter, therefore, for a Japanese woman to be seen at a Law Court demanding her rights of her husband. But having acknowledged themselves to be members of the nation, our women cannot be blind to the great power and influence of European women, not only upon social and political reforms but also in solving national problems. And they begin to know that it is women's duty and right to uphold the high and holy ideals of society, and to form a sound public opinion throughout the country. Their political consciousness has thus been awakened, and they watch with great interest the movements for woman suffrage. Before the war they had warm sympathy for the suffragists, though they were rather dubious about the somewhat violent actions of the suffragettes. But recently the entire change in the conduct of the latter has altered their opinion of them. Now they understand that it was not the motives but only the means of which they could not quite approve. But in Japan the time has not yet come for women to raise the question of women suffrage, and they are now satisfied in working with men to purify and elevate society.

Our women have also begun to realize that heaven has ordained the women of the 20th century for a great mission, and though they are weak and insignificant, still they have mighty powers, deeply hidden in their hearts which will unfold if they only can believe. Israel was a small country, but there the religion of the world was born. Greece was a tiny peninsula, but the greatest art of the world was cultivated there. So God may choose to use His frail vessels to accomplish His good will.

With a conviction that there is a domain which only women can and must reclaim in this century, Japanese women, though very young in the history of modern education and the experiences of women's movements, are no long narrow-minded, ignorant, self-interested beings. Their eyes are open to the living facts of the day, and now they are busily qualifying themselves, by culture and education, for this mighty mission. And their ardent spirit is ready to join hands with that of their elder sisters of the West, and to follow them, if they would lead, in the accomplishment of the work of restoring international peace and promoting the (true) happiness and welfare of man.

"RIGHT THINKING AND RIGHT DOING"

the defence of Liége, what an impression was made upon the minds of Japanese women!

The fall of Liége, the brutal ravages of the German Army all over Belgium, the intense suffering of the people, the destruction of the beautiful cities, of the old historical ruins, and of the precious and rich treasures of art and science, the pride of the nation, they glory of civilization, and the most tragic beauty and nobility of the King himself, the incarnation of true chivalry and heroism, all these touched the deeper chords of the women's hearts, and these they make the objects of their sympathy, indignation, and adoration. They wept over the awful fate and the terrible suffering of Belgium, the peace-loving, industrious, commercial Belgium. Forty girls' schools in Tokyo sent a manifesto to the 300 schools for girls all over Japan, asking them to raise a donation for the suffering refugees of that unhappy country. The scheme was readily approved by all these girls, and the sum thus collected was sent to Belgium. This was the first attempt made by all the girls' schools of Japan as a body to express the feeling of fraternity for a foreign country.

### Admiration for English Women.

Five hundred students of our Japan Women's University, in answering the question, "What do you think of the war?" wrote unanimously their admiration of the honour and nobility of England, whose aim in the present war is to protect the weak and oppressed, to conquer the tyrant, and to restore peace and humanity. They also expressed their deep love and sympathy for the ruined countries. And they believe that since Germany is fighting against the right and the true, however mightly and strong she may appear for the present, amply maintaining her position against nearly the whole world for two years, the time will come when she will hear the words "So far shalt thou go, and no farther."

English women's work in the war is another great stimulus for Japanese women. Well educated English mothers, wisely bringing up their children, and working in unison with their husbands, have hitherto been the admiration and ideal of Japanese young women. And the living example of Her Majesty Queen Mary, followed by the ladies of rank and the women professors and students of the colleges and universities, is an inspiration to them, and they recognize in them the good results of education. So nowadays a stronger desire for higher education is generally felt among the women of our country, and public opinion is in sympathy with it. Recently at a Government educational committee meeting a proposal to acknowledge the women's university as being on an equal footing with the men's university, and to give degrees, was passed. In our university, at the time of the Coronation, the alumni planned to build a memorial hall for the promotion of domestic science, study, and research. This is a small matter, but it is the work of women only for the benefit of the women of the future, a token and a sign of their intellectural awakening.

# JAPANESE WOMEN AND THE WAR

## IDEALS AND ASPIRATIONS

(From "London Times.")

The opportunity of women has come. But nobody ever suspected till the outbreak of the present war that it would have come in the way it has in Europe to-day. None, even the most romantic, would ever before have dared to dream that million of the strongest and the best of the nations would have gone to the battlefields, inevitably leaving all the social and national work to be done by the weak hands of women, whose hitherto unproved yet wonderful latent powers have adequately met the necessities and efficiently performed their duties in the wider scope of their new life.

It appears as if man, the stronger and the far more advanced and ambitious half of the community, has been for the time being put aside, so to speak in order to give the weaker half the time for her equipment and preparation to take her place more fully by his side. However that may be, there is another important and remarkable fact which has gradually been manifested. The brutality and savageness of war have struck awe into the tender hearts of mother and wife. They are well convinced that it is not the narrow egoistic patriotism, nor the mighty armaments of ambitious militarism, nor the accumulated wealth of materialism that bring peace and joy to man, but the true spirit of universal love; and they have made up their minds to be the peacemakers for humanity. Thus the sad and horrible results of war will, we may hope, finally abolish the barriers of the naturally narrow and secluded lives of women. Really wonderful changes are taking place both in women's hearts and in the positions which women occupy.

### THE WOMEN OF THE EAST.

But is this universal commotion felt and realized, and are those momentous opportunities grasped only by the women of the West? Are the women of the Orient so deaf and blind as not to see and hear of the wonderful activities and heroic devotion of those of belligerent nations? If not, what effects of the war do we see among Japanese women?

Japanese women, the most secluded and modest of their sex, who have long been educated so as to be wise mothers and good wives, are, on the other hand, by heredity and tradition, zealous worshippers of heroism and patriotism. And often they themselves become heroines and at times courageous warriors in the tragic scenes of life. Our history is rich in such instances. So when Belgium manfully stood for the cause of righteousness, and showed her determination in

whether it will be a friendly reunion or a hostile encounter. It is of the utmost importance that we prepare for this meeting with a mutual and friendly understanding of thoughts and ideals on both sides of the Pacific Ocean. If we could succeed in establishing a spiritual union of the East and West, then every other thing would of itself come into harmony. If the scholars together with the religious men, the statemen, and business men of both lands and all other lands, could heartily coöperate as the Association Concordia proposes, for international peace and good will among men; then we might promote a better understanding between the East and West, and create a reciprocal sympathy in relation to the deeper problems of the spirit.

This is the gleam upon the hills, this is the glow in the upper air, which the Association Concordia is eager to see increase into a non-day glory.

"RIGHT THINKING AND RIGHT DOING"

ences of the nations, and leading them to create international sentiments and ideals, on the other hand, the study of comparative religions and psychical researches have been enabling the religious men to lay aside deeply rooted prejudices and to solve the traditional difficult problems of the world's religions.

Hitherto, a confederation of the different denominations and sects, and brotherly love among Christian nations have been largely spoken of, but not an inclusion of all the religions of the world. The diversities of religions—of Buddhism, Brahmanism, Confucianism, Judaism, Mohammedanism, Hinduism, Zoroastrianism, of one hundred and thirty-seven sects of Christianity besides—have been so conspicuous that few have dared to think of a tolerance among them of different opinions, still less of an appreciation and understanding of each other. When religions are too subjective, they become so self-assertive and self-conscious; and on the other hand, their view-points become so narrow and partial that there always rise feelings of rivalry, jealousy, hatred, and revenge. This is true even among the followers of the Prince of Peace, and the believers of the God of Love. The history of religion is often unfortunately a history of blood shedding. The history of the Crusades, of the Thirty Years' War, of the Hugue not persecution, and what not! History is full of it. Men must be baptized with a holy love and enlightened with the divine wisdom from on high, before they can fully perform their duties as the sons of God.

The world has now, however, begun to realize that the essence of all the religions is one. And such fundamental moral sentiments, as justice, veracity, gratitude, service, sympathy, and love as well as wonder, awe, reverence, worship, hope, and aspiration—of all that which quickens the human soul—are, by the comparative method, proved to be common to all the various systems of faith. But "difference of climate, environment, heredity, and racial origin, these" it has been shown, have given "rise to varieties in the expression of one and the same fundamental religious feeling." Therefore, it is now even thought among the leading thinkers that a universal religion, attaching a higher value to spiritual freedom than to tradition and adherence to creed or custom, and lifting itself above all difference of creed, color, class, and race to a sublime spiritual plane, is a possibility.

In saying this, however, I do not mean to propose an amalgamation of religions. Indeed, numerous diversities of characteristics, and various forms of expression only add richness to the religious Whole—each representing a special part of the Whole. Therefore, it is not to unify all the religions into one form, one doctrine; but to bring all the special histories and the individuality of each and all the religions into a great harmonious Whole, wherein each may fill its apportioned place, and form part of the grand symphony of the world's sacred ideal, this is the music that the Association Concordia is endeavoring to play.

The next stage where both the political and commercial problems of the East and West are to meet is on the Pacific Ocean. The world is wondering

national matters, however; if the standard of national intercourse is still so low and brutal as that, what a perilous condition there is for the world. No safety, no protection for the weak; in fact, nobody knows tomorrow's fate, for has not might the supreme right?

In the present war, who does not shudder at the savageness of the fighting, and weep over the awful fate and the terrible suffering of Belgium; the peace-loving, industrious, commercial Belgium; the most lamented neutral state, Belgium? "Let each man think of his neighbors," says a writer, "of the carpenter, the station-agent, the day-laborer, the farmer, the grocer—who are around him, and think of these men deprived of their all, their homes destroyed, their sons dead or prisoners, their wives and children half starved, overcome with fatigue and horror, stumbling their way to some city of refuge, and when they have reached it, finding air-ships wrecking the houses with bombs and destroying women and children." To say nothing of the damage done to the beautiful cities, the quaint, old, historical ruins, the precious and rich treasures of art and science, the pride of the nation, and the glory of civilization; who is not awe-struck at the dreadful tragedies of this war?

It is useless to state reasons showing the momentous importance of international laws, an international police organization, and an international arbitration, that, representing the collective determination of civilization, should have authority and power enough to enforce justice, to prevent uncontrolled violence, to limit excessive accumulation of armaments, and to guarantee the neutrality of nations. An increase of the number of neutral nations is an essential condition of peace. "Humanity awaits with eager eyes and attentive ears, the rhythmic pulsation of united life, feeling assured that progress now requires a centralization of all human efforts for the amelioration of mankind," says Mr. Anderson.

We believe that the zealous spiritual coöperation of the leading thinkers and eminent scholars of various nations, including international men of business like Carnegie and Rockefeller—in other words the centralization of all the efforts of the "perfect men" as Shelley calls, the "tribeless and nationless men" alone can promote such institutions and organizations, and effectively solve those imperative international questions as well as the common national problems, which are now confronting each nation, and which can be properly solved only with the international mind and interests. Again, I say, this is the aim of the Association Concordia, and for this purpose, we the members of the Japanese Association appeal to our American friends for such coöperation on behalf of humanity.

The last but by no means the least question is that of an international religion. The importance of the coöperation of all the religions of the world is at present beginning to be keenly felt. While the earnest study of the history, literature, ethics, and philosophy of various nations has been shedding the necessary light for an understanding of the mutual relations and the reciprocal influ-

and peculiarities of each other can not be awakened. Appreciation and admiration of others' superiority and a ready adoption of one another's best are essential to the enrichment of civilization.

A common language would be very helpful to facilitate such a world-wide intercourse; and the need, therefore, of the invention of such an international language will be felt more and more keenly. The universal language, the international alphabet, and like aids are gradually getting wider fields for their use. In Japan, the Educational Committee is now studying and devising the best method for substitution of the "Romaji," the Roman alphabet for the ideographic Chinese characters, which are a great obstacle to the people of the East, in their way of communication with the West.

If we could succeed in abolishing this great barrier, the barrier of different languages, what would be toward the desired end? After the war, however, may not perchance, the refined, elaborate, rhetorical English, with which Milton sang his immortal songs and Shakespeare painted his grand pictures of life of man, become the most favored and widely spoken tongue? Who knows?

To fight, to conquer, to have absolute control, "world power or downfall" is the desire of the few absolutists, the ambition of the few despotic chiefs of the nations. The rest of the multitude, the mass of the people, are generally industrious, devoted to their crafts, peace-loving, well-contented with domestic duties and pleasures; whom the consuming passions and the burning ambitions of the few thrust into the whirlpool of horrible war. Destitution, destruction, and devastation are their only fate. Poor people! It is no fault of theirs, that they must thus suffer. No! under autocracy they have no choice, no will of their own. Absolute obedience and subjection are required. "For the success of an ambitious hero, the lives of a thousand, aye, ten thousand shall be sacrificed." Why, and how long will they endure these terrible calamities without an effort toward self-protection and self-preservation?

The growth of democracy, in some form, will now be an inevitable result in the interest of civilization. "Even a partial substitution, at least, of the rule of the people for the rule of those who esteem it their God-given right to govern the people despotically and tyrannically, might prevent a repetition of such disastrous warfare," says Roosevelt.

Again, the wide adoption of democratic principles, even in lands retaining monarchical governments, will also serve in striking ways to unify the forms of social organization and activity; a very important factor in the creation of internationalism.

It has become clear in the present war, that to the eye of despotic militarism —to which morality and religion are mere silly talk and the superstitious rites of the weak-minded—no right, no treaty, no guarantee, that is not backed by force, has any value. To it, "might is right," and a treaty of neutrality is nothing but "paper." If there is no meaning to the words "right" and "wrong" inter-

and response to any appeal of the Concordia movement, was shown among the leading thinkers. The statements of their views given me in answer to my questions—refer to the first number of the English Report of the Association Concordia—prove the verity of my words. Not only their words of sympathy, but their thoughts and sentiments have assumed a tangible form in the organization, first in the United States of America, and next in England. But this is not all. "There was established some years ago, in France," says President Butler in his personal letter to me, "under the leadership of Baron D'Estournelle de Constant, an organization known as Conciliation Internationale, having precisely the same end as you propose for Concordia. . . . . In the United States, the Association reaches more than 70,000 persons and is steadily developing its range of influence. Additional branches are being organized at this moment in Great Britain, in the Argentine Republic, in Spain, in Italy, and in America." The Baron himself wrote to me. "Before war, there is arbitration, but before arbitration there must be conciliation, and before conciliation concordia. Such are the steps of the progress of ideas pursued today by the people of good intention in all civilized countries." Then in Rome, you will meet Mr. Hendrik Anderson, patiently and steadily working for more than ten years, "to create a world centre of communication." Strange coincidence you may say. But this is not a mere coincidence nor a miracle. In Germany, where general coöperative movements of any kind, owing to the notably independent attitude of each university as well as each scholar, are usually difficult to promote, both in herself and with other nations; I say even in this Germany, the aims of the Association Concordia attracted the attention of eminent scholars. They told me that through the deep intercourse of true personalities, ways might be opened for the long desired coöperation between the scholars and educators of the two nations. Surely this might have been done, and it will yet be done when the peaceful relations of the nations are restored. These are unmistakable proofs of the necessity and the desire for the birth of an international spirit. Professor Ross of the Wisconsin University said when I met him at the University last time, "The Concordia movement would have been impossible three years ago, but now it is not only possible but feasible."

The new conditions of modern social life—physical, social, and cultural—are making possible a world-wide development in the higher life of the spirit. Modern popular education and the so-called scientific world-wide view are unifying the interests of the nations. But in the place of the geographical barriers, which have rapidly been overcome by the power of science, there are still other great obstinate barriers—the barriers of language, race-feeling, national interest, habits, and modes of thinking. How these barriers can best be removed and the nations be brought into a good mutual understanding is a very important question. Without this thorough understanding among the nations, all the prejudices can not be taken away and the mutual interests in the characteristics

# THE CONCORDIA OF RACES

While the thickest of thick darkness still covers the valleys, there is yet a gleam upon the hills, and a glow in the upper air, which the Association Concordia is glad to discern.

Beginning with the tower of Babel, history repeats the old, old story of the rise and fall of mighty nations, of the aggrandizing dreams of men. Many a great Caesar, many an ambitious Napoleon has attempted to build up world-wide dominions with force and might; and failing left them in consternation and disaster. To them might gives right; yes, might is the supreme right. With mighty power, they not only trample on their political, military, or trade rivals, but ofttimes upon even their religious antagonists. "The flesh of the weak is the food of the strong."

Now Germany is ravaging all Europe with the most tragic of wars. But according to the philosophy of Germany, war is not only right for the maintenance of her existence; war is "a necessity for her success;" aye, war for her is the only factor of education, culture, and ability. She believes that she is the divinely ordained nation; ordained to accomplish the salvation of the world by force, by despotic militarism. Therefore aggrandizement is a passion with her emperor. No cost is too great for her to pay for this cause. Almost everything consequently has been sacrificed to the construction of the stupendous temple of militarism, with which she would overawe the world.

I am not discussing the questions whether or not it is necessary for Germany to accumulate such mighty armaments for the maintenance of peace, or if it is morally right for her to fight for her own life and "success" as she is doing, and as the other powers might do under similar circumstances. I want only to emphasize the most ancient and the most grave law of nature, that "things produce after their own kind." Yes, war begets nothing but war; militarism is the worst violator of peace, harmony, freedom, and justice. "Under any conditions war is sad enough. But the saddest thing is to know that even now, in the twentieth century after Christ, man still relies upon brute force to further his ambitions. Can we not learn to be ambitious for humanity instead of for a single nation?"

To save the world from this saddest calamity, and to produce a better and a more humane state of society, through the coöperation of different peoples and races, not only among religions, but among nations, is the great aim of the Association Concordia. In order to bring about such coöperation, I went to America and Europe two years ago. There I found, to my pleasant surprise, the same spirit, which had promoted the organization of the Association Concordia, awakened also deep in the heart of those nations. A spirit of ready approval

ble to do anything in the way of raising funds for nearly two years. But now for several months past the prospect has been growing brighter and I feel confident that the time of my success is drawing near. In fact, already within the past few months *yen*, 140,000 have been subscribed, but we are determined not to establish the college unless the fund reaches *yen*, 150,000 at least. Our determination is to raise *yen*, 300,000 within a few years.

(THE IMPERIAL EDUCATIONAL ASSOCIATION, KANDA, JAPAN.) 1900

higher schools better. The universities of Germany have produced that wonderful system of secondary education for which Germany is to-day so famous. Colleges send forth teachers better qualified for their profession, and through their influence common and higher schools are continually being improved.

In Japan there is a growing need of lady teachers for common schools and higher girls' schools, on account of the fact that business and other vocations are absorbing the men teachers.

I will only refer to one more objection, namely, that the higher education will injure the health of women. This objection has been raised for a long time in all Western countries. But now the statistics of those countries which have encouraged the higher education of women tell us that not only does an intelligently arranged system never injure their health, but that on the contrary it improves it. The results testify that intelligence is a benefit to the body. Educated women are the longest lived. Statistics clearly show there is less mortality among young women in colleges than among women of similar age in other positions. On several occasions, while examining women's colleges in America, I was told that the health of students, as a rule, constantly improved from the time they entered to the close of the senior year, so that most of the students graduated as strong and well-formed women. But I am very sorry to say that in Japanese schools, the health of boys and girls is not in a good condition, as may be inferred from statistics. This is a result of a defective physical training. Our present system of gymnastics is a mere imitation of the systems of other countries, and is not fully fitted to our real needs. We must study physical education scientifically and develop our own method of gymnastics which shall be fitted to improve the physique of the nation. We need a department of physical education in colleges for women in order to send out better qualified teachers of gymnastics.

Some years ago I wrote a book on women's education embodying my views and convictions on the subject, and emphasizing the need of an institution for the higher education of women. The book has been widely read, and seems to have been well received by men engaged in education. Marquis Ito, Count Okuma, Marquis Saionji, Prince Konoye, Baron Y. Iwasaki, Baron H. Mitsui, Gov. Utsumi, Mr. Shibusawa, Mr. Sumitomo, Mr. Dogura, Mrs. Hirooka, and several other persons of national reputation approved my views and offered their personal help in carrying out my plan of founding a women's college under the name of the Nippon Joshi Dai Gakko. I was greatly encouraged and began to devote myself entirely to the undertaking, resigning the presidency of the Osaka Baikwa girls' school, which I had been occupying up to that time. I held meetings both in Tokyo and Osaka by inviting the representive people of those cities, laid my plans before them and asked for their sympathy and assistance. Their interest was greatly awakened, and the prospect seemed to be very encouraging for a time. But unfortunately a severe economical crisis came on and it was impossi-

IV. DEPARTMENT OF MUSIC.
V. DEPARTMENT OF SCIENCE.
VI. DEPARTMENT OF ART.
VII. DEPARTMENT OF CALISTHENICS.

I think these branches of learning are necessary for our girls in order that they may be able to help in reforming society, in perfecting home life and in training children.

But several objections to the higher education of women have been raised by some of our countrymen.

Marriage and home life, they say, are the lot of women, therefore they should be given training to fit them for their lot, that they may be able to discharge their duties and responsibilities as wives and mothers and that this will be all that women need; but such a course would be too narrow. To be a good wife and mother, a woman needs a wider education. In what other position can well-trained faculties be more serviceable? Intelligence is as profitable in cooking and housekeeping as in other things. Cooking and housekeeping are, moreover, closely allied to the fine arts. Well-trained wives will make better dishes,—more varied and better prepared; they will make homes which will be in all respects more attractive, since a refined taste will make itself felt in every department of household affairs. Besides, men need helpmates who shall be mentally fitted to enter into sympathy with them in their public life. Though a wife who is simple-minded and faithful, may be useful in house work, yet, if she has no sympathy with her husband in all circumstances, he will miss that which is the highest function of a wife.

As a mother, woman must also have a broad education. A mother must, in a measure, combine all the arts and professions; she must make laws and execute them; she must be teacher, physician and advocate. There is, thus, no faculty which cannot be actively employed, no knowledge which cannot be profitably used. The education which she imparts at home will be in some respects of a higher kind than that given at schools; for in her daily intercourse, there will be an intellectual stimulus which will grow more powerful with advancing years.

Woman is also a member of society. She has duties to her neighbours as much as to her family. We educate woman not merely as a thing for practical and secular uses, but as a soul, that she may become light and inspiration to all around. If we give girls only so-called practical knowledge and incline too much to utility, the highest utility will never be secured.

Another objection is, that if we attempt to start a college for women, the general education of women may be hindered. But history testifies that the higher institutions of learning improve the lower shools. There is a profound meaning in the saying:—"The University created patrons, and was not created by them." In America, the higher education of women made the common and

# COLLEGE EDUCATION FOR WOMEN IN JAPAN

In what way shall woman's education be carried on in Japan? Let me freely express the views on this subject which I have arrived at as the result of my observation in Western countries and of a careful study of the condition and history of girls' schools in Japan.

I think we must study this important subject scientifically in order to come to a satisfactory solution. Our schools must be fitted to the needs of the times and be in harmony with the history and spirit of the nation. There is no doubt that we need more education for our girls than they receive at present. Many faults among women can be remedied only in this way. Many Japanese think that such faults in women as impoliteness, pride, unfeminine manners, and disobedience to parents are the results of modern education; but I think they are rather due to a lack of it. In order to perfect our women, I believe it is essential that they should receive a collegiate training.

Many Japanese think that higher education is simply intended for those who are to enter the learned professions. The aim of parents in giving such education to their children, they would say, is to make them lawyers, doctors, teachers, engineers; and they seem to forget that it gives also an aptitude and efficiency in the management of men and affairs which are valuable in many other ways than in professional life. They do not understand that it is not so much desirable for the increased ability for professional life, as for the broader sympathies, the clearer mental and spiritual insight, which are thereby acquired.

I think our girls, after a thorough general education, should study some higher special branches. Accordingly my scheme for a college for young women would include many departments, interdependent it is true, but each with its own distinctive purpose. Such departments would be:—

I. DEPARTMENT OF DOMESTIC SCIENCE.

This consists of the Chinese and Japanese Classics; Economy; Hygiene; the Science of Nursing; Art; Mental Science; Child-Study; Natural History; Domestic Chemistry; Physiology, etc.

II. DEPARTMENT OF PEDAGOGY.

To this belong Sociology; Psychology; Ethics; Physiology; Pedagogy; History of Literature; System of Education; Woman's Education; Family Education; Child-study; Domestic Science, etc.

III. DEPARTMENT OF LITERATURE.

This comprises Japanese, Chinese and English Literature; History; History of Philosophy; Pedagogy; Domestic Science; Psychology, etc.

# 英文論文

# 解　説

本巻は、『成瀬仁蔵著作集』全三巻の最終巻として、明治四十五年（一九一二年、同七月には大正元年となる）春から、大正八年（一九一九年）三月四日の成瀬仁蔵の死に至る間の著作・講演・書簡などを主として収めた。即ち、成瀬仁蔵の五十三才から六十才に至る、その晩年の七年間にあたっている。

この大正初期の七年間は、我が国内外において、変動の大きかった時期である。この期の最大の歴史事象として、大正三年八月より同七年十一月までの第一次世界大戦があり、我が国も対独宣戦を行い、連合国側に立った。この第一次世界大戦に参加することで、戦前と戦後の国内外の状況は大きく変ったといえる。

明治三十七、八年に行なわれた日露戦争の勝利によって、たしかに我国は国際的地位の向上をみた。しかしそれは日本の経済的成長とは結びつかず、むしろ植民地経営・軍事予算の拡大、貿易の不調・外債の増加など問題をかかえ、これらに対応する為の必要財源は、一般国民への課税の増大となって、慢性的不況を招くこととなった。農村においても、農産物価格の低落や兼業収入の減少、扶養人口の増大などがあり、小農の没落状況が展開した。都市では各地に労働問題が当然ながら頻発した。政府のかゝげた、行財政整理という緊縮政策と、軍備の拡張を要求する軍部の対立を契機として、第一次護憲運動がひろがり、政界は騒然となった。

第一次世界大戦へ参加し戦勝国の側に立つことによって、自らは殆ど戦わずして、漁夫の利をしめることとなり、日本経済は空前の輸出の伸びと相まって一転して経済の好況期をむかえた。連合国側からの軍需品や一般生活の必要品の注文に加え、ヨーロッパ諸国が一時的にアジアから手をひいた為、日本商品の輸出は順調に増加し、生産に

拍車がかけられた。

軽工業部門と共に、遅れていた重工業部門の生産も飛躍的に伸び、金融資本も大きく成長して、日本経済は独占資本主義体制の段階に入っていった。こうした事情は、都市人口の増大をもたらし、農村からの移住が目覚ましかった。

一方、大戦中に成立したソヴィエト政権に対して、日本はシベリア出兵を行い、国内に米騒動を引きおこすと共に、物価は上昇し、一般国民の生活に大きな影響をみるに至っていた。

この変化の中で教育政策にも、新しい動きがみられた。それは大正六年（一九一七年）九月の臨時教育会議の召集である。この会議は、特に天皇の「上諭」が付された内閣直属の教育政策審議機関であり、政治的な色彩の濃い会議であった。第一次世界大戦前の大正二年六月に設置された文部省の教育調査会が調査会のメンバーの傾向もあって、かなりブルジョア・デモクラシーの要素をもって教育諸側面の検討を行っていたのに反して、この臨時教育会議は、国家目的に添う、教育政策の全面的検討を行うためのものであった（この両教育会議いづれにも、成瀬仁蔵はそのメンバーとして参加している）。この時期に、この会議が開かれたのは、一つには明治後期の教育拡充政策に伴って、教育制度の抜本的検討をせまられて来ていたこと、二には、大正期に入って国民の教育要求が、さまざまな段階で量的に質的に強まっており、その対応を求められていること、第三には大正デモクラシーの民本主義思想のもりあがりにみられるように、反体制的な世相的動向がひろがりつゝあったことがあげられよう。臨時教育会議は四十名の委員を召集し、大正八年五月まで、小学校・男子高等普通教育、大学教育及び専門教育・師範教育・視学制度・女子教育・実業教育・通俗教育・学位制度の九項目について審議及び答申が行なわれた。以後この答申にもとづき、学校令等の改正が行なわれたわけで、教育政策史上一時期を画する会議であった。

ではこの間の女子教育の動向はどうであろうか。明治四十一年に小学校六年間が義務教育となったが、より上級への進学はやはり限られたものの特権であった。しかし第一次世界大戦中から次第に進学率が伸びはじめ、戦後は、学校数も増え中等教育への進学率は飛躍的な増加をみせる。高等教育においても、大正二年、東北帝国大学が女子にも解放され、漸く、高等教育における男女共学の端緒が開かれたが、未だ高等教育（多くは専門学校）をうける者は少数であった。しかし第一次世界大戦を境に進学者が増加していく。

成瀬仁蔵はこうした時期にその晩年を送ったわけであるが、この時期の特色として四つの重要な点について、簡単に指摘しておきたい。

第一は、日本女子大学校教育の充実であり、高度化である。成瀬は近い将来に専門学校から名実共に女子総合大学たらしめようとして様々の準備を行った。例えば日本女子大学校参考館、家政研究館の設立や新学制の施行及科目選択制の大巾な採用があり、「軽井沢山上の生活」「女子教育改善意見」などのパンフレットに表われているように、女子高等教育の理想像を構想し、精神的にも又、具体的にもその構想の実現に向けての諸準備を展開している。

第二には、教育界への提言、活動である。教育調査会・臨時教育会議のメンバーとして女子教育に関する問題はいうまでもなく、学校教育・教員養成・体育奨励・国字国語の改善・学風改革のための提言などを行った。一方、後述する、多くの講演・著述などによって、その教育観を主張し続けた。

第三には帰一協会を中心とする宗教的精神活動がある。宗教は世界にさま〴〵のものがあるが、究極的には一に帰する、調和するはずであり、帰一を求めることが現代の要求であるとの判断によって、国内外に同調者を求めた。国内的には、帰一協会の活動の他に自助団を組織し、日本女子大学校の関係者を集め天心団が生れた。対外的には大正元年八月から翌二年三月の、欧米巡遊に際して、百七十余人におよぶ欧米各国の当時の著名な人物に逢い、

賛同の署名を得ている。

この精神活動は、同時に世界平和を希求する活動としても展開し、婦人にその果す役割を期するところ大であった。

第四に触れなければならないのは、その死に際しての姿勢である。大正七年初より内臓に違和を感じながらも活動し（肝臓癌であった）、翌年一月半ばに遂に床臥に至り、その病状が周辺の者に明らかになると、今後の事を評議員に諮り、一月二九日、講堂に評議員・教職員・卒業生・在校生を集め、告別講演を行った。二月初旬には「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」の三綱領を執筆し、三月三日死の予告をうけ、「全く安心だ」「総て満足だ」の最後の言葉を残して、翌四日朝永眠した。この荘厳・厳粛な逝去に至る日々は、それまでの成瀬仁蔵の人格のすべての凝縮を示すものであり、自らの帰結の姿であったといえよう。

前二巻と同様、本巻も単行本及びそれに準ずる論稿を初めにあげ、以後、年度順に集載し、終りに書簡・英文を別に掲載する形をとった。第一巻及び第二巻の印刷後及び第三巻の編集後に見つかったものも、別頁としてのせた。

以下、目次に従って、若干の解説を加える。

○『新時代の教育』大正三年一月刊、菊版　四二〇頁、博文館　昭和六年十月再版　桜楓会出版部

目次にみられるように、教育全般にわたり、その所信を述べたもので、明治期を青年日本の学習の時代とするならば、大正期は壮年の意気をもって活動すべき第二の維新の時であるとし、その為の教育の重要性と方法を、広い視野に立って説いた大冊である。成瀬の晩年の教育思想を知る意味で、重要な著作である。本書を出版した直接的

契機は、大正二年六月、教育調査会が設置され、その委員となったことにある。教育調査会という具体的に政策に反映する場での発言の機会を与えられ、「教育の制度乃至方法に関する改善案を提出されるに当り、その基礎根拠となるべき理想主義精神を、直接には他の委員及び当局に、間接には教育界及び一般社会に予め知ってもらひ、進んでは多数の賛同を得て、帝国教育改善の気運を促進助成したい目的で著された」（再版の序文より）著作である。この背後には、これまでの長年にわたる教育活動の蓄積と、大正元年より二年にかけて行った欧米の識者との思想的交流によって、その教育的確信をより深め、世界の中の日本の役割を積極的に再確認しようとしたことがあげられよう。

本書に表れた意見は、当然、教育調査会での諸発言となった。開議に当って、女子高等教育制度の制定、国立教育研究機関の設置、学風改善に関する施設の設定、教員養成、中等教育、体育、国字などの改善等、諸項目にわたって文部大臣に建議すると共に「大学教育法改善案」の小冊子をつくって委員等に配布し、その意見を熱心に主張した。会議での発言は教育調査会の報告書によって知ることが出来る。（『成瀬先生伝』五〇八頁以下）

なお、本書には「帝国教育改善案草稿」が残っており、『成瀬仁蔵著作集』第一巻及び第二巻におさめた著書と同様、あらかじめ、執筆者を別に定めて準備された。すなわち、再版の序文の「執筆者よりのおことわり」によれば初めは成瀬仁蔵の方針により計画や構成を相談して作り、草稿に眼を通し、討議修正を重ねていったが、後の方は草稿を印刷し、校正段階で修正、終りの方は執筆者が成瀬の旨意を敷衍して書いたまゝで印刷したということで、「説明不十分なところも多く、先生の考へが精密に表記されてゐるとはいへない上に、紙数を少くするため文語体にしたり、誤植も少くないので、大へん読みづらいものとなった」との注釋がある。草稿の執筆者は現在のところ確定し難い。

○『新婦人訓』　大正五年八月刊　四六版　三一四頁　婦人刊行会　大正十四年五月再版　桜楓会出版部

初版は、婦人刊行会の家庭文庫の一冊として出版され、八刷を重ね、その間、発行者などに変更があり絶版となっていたものを、桜楓会が再版したものである。

婦人文庫刊行会は、本書出版の理由を「序」として次のように述べている。

日本の婦人はまだ眠ってゐる、婦人の自覚、婦人の自活などといふ声が時々識者の間に起るが、何の反響も残さないで消えてゆく、併し眠ってゐる者を無理に呼び起こす必要はない、眠ってゐると云へば文字が悪いが、婦人が眠ってゐるのは眠ってゐられるから眠ってゐるのである。何事についても同じであるが、何の必要もないのに、騒ぎ立てる必要はない、騒ぎ出す必要が生ずれば、眠ってゐる者は必ず覚める。だから自覚とか自活などといふことが飜譯されて入って来る間は、日本の婦人は幸福なる睡眠を続けてゐた方が宜しい。

併しながらこれは日本だけの話である、欧米諸国に於ては近頃婦人の知識が益々進んで、中々眠ってゐられない事になった。政治・社会政策の上のみならず、平和問題にも立入って意見を発表するの必要を感じて来た。殊に欧州戦争の始まって以来、婦人は手不足なる男子の職業を引受けて、屋外の労働にさへ従事すること、成った。是皆必要の結果であって決して奨励や教育の結果ではない。併しながら是を外国の事であるからと云って傍観してゐるわけには行かない。かうした社会的変動は日本にも何等かの反響を與へずには置かない、もし其反響を避け得ないものとすれば、日本の婦人は、今の中に是非共其反動を受納し得べき準備をして置く必要がある。是本会が特に本書を刊行する所以である。

本会の関係者は次の如くである。

## 編集顧問

東京帝国大学教授　文学博士　芳賀矢一
東京女学館幹事　西田敬止
東京帝国大学教授　法学博士　和田垣謙三
東京裁縫女学校々長　渡辺滋
日本女子商業学校学監　嘉悦孝子
東京女子医学専門学校々長　吉岡弥生
文部大臣　法学博士　高田早苗
文部省普通学務局長　田所美治
東京高等女学校々長　棚橋絢子
女子英学塾々長　津田梅子
日本女子大学校々長　成瀬仁蔵
東京文科大学々長　文学博士　上田萬年
女子学院々長　矢島揖子
山脇高等女学校々長　山脇房子
文部次官　福原鐐二郎
跡見女学校々長　跡見花蹊
日本女子大学校学監　麻生正藏

（イロハ順）

東京高等師範教授　文学博士　佐々政一
三輪田高等女学校々長　三輪田真佐子
三輪田高等女学校教頭　三輪田元道
文学博士　三宅雄二郎
東京帝国大学教授　文学博士　三上参次
成女高等女学校々長　宮田修
実践女学校々長　下田歌子
東京女子高等師範学校教授　下田次郎

## 評議員

法学博士　浮田和民、　杉山重藏

当時の著名な教育関係者を顧問として企画されたことがわかるが、成瀬もその一員であった。

本書は大正三年四月より同五年頃までの、日本女子大学校の学生や桜楓会の修養会の講話の一部を編纂し、一般向の書として出版した著書である。本書出版後、これに引続いて続婦人訓というべき著書の計画もあったようであるが実現に至らなかった。第一次世界大戦期に日本の婦人の自覚を精神面、生活面にわたってうながした、まとまった啓蒙書である。

○『女子教育改善意見』大正七年九月　A5版　一二〇頁　パンフレット　昭和五年十二月再版　A5版　パンフレット　桜楓会出版部

臨時教育会議の「女子教育ニ関スル件」の答申の審議過程にあって、成瀬の女子教育論、特に女子の高等教育について他の委員の理解を求めるためと、日本女子大学校の基礎が漸く確立し、又社会的にも、文字通りの女子高等教育機関としての女子大学を設立する機運が熟して来たとの判断から、多くの人々の賛成を得るために、この年の夏に執筆し、それを小冊子としたのである。

臨時教育会議において、一委員として、熱心に発言し、参加し、病臥する直前の大正八年一月十三日の会議にも出席し、精神教育についての意見を述べたほど、積極的であった成瀬は、この会議を通じて種々主張しているが（「臨時教育会議速記録」「同関係書類」など参照）、やはり注目すべきは、女子教育関係のそれである。

成瀬の女子教育論は、欧米の模倣に終らない、日本の実状をふまえたものであることと、男子大学とは異る女子の大学としての特色を高等教育機関においてももつことであり、家政学科・宗教科及び医学科の三学科をおき、人格教育を基礎に大学教育がされるべきことが主張された。しかし、臨時教育会議のメンバーからしても、成瀬の主

張するところはとりあげられず、委員の多くは保守的な態度に終始し、良妻賢母主義教育の方針から一歩も出ようとせず、女子高等教育の必要性を確認することは難しかった。従って、大正七年十月の女子教育に関する改善の答申は、誠に精彩を欠いたものとなった。

成瀬仁蔵の死後、臨時教育会議の閉会にあたって、総裁平田東助は、成瀬仁蔵について「豊富ナル教育上ノ識見ヲ有セラレ而モ今日各位ト共ニ会議無事終了ノ喜ヲ分ツコト能ハスシテ中途ニ於テ遠逝セラレタルハ遺憾ニシテ今更追悔ノ情ニ堪ヘス」と述べているが、この会議の答申に従って其後、教育政策が展開していくのであり、委員の中の少数派であった成瀬仁蔵の意見が実現するには更に多くの時を必要としたのである。（海後宗臣編『臨時教育会議の研究』・日本女子大学教育研究所編『大正の女子教育』参照）

○『世界統御の力』大正六年十二月　菊版四八頁　パンフレット　博文館印刷所

目次より察せられるように、世界を統御するものは権力でなく道徳意志であることを主張したもの。

帰一協会の会員にその論旨を配布し、協会員の有志による意見を得て、改めて印刷に附したもの。渋沢栄一、阪谷芳郎、森村市左衛門、荘田平五郎、床次竹二郎、姉崎正治、中島力造、早川千吉郎、高田早苗、井上哲次郎、浮田和民、鎌田栄吉、服部宇之吉ら（原稿到着順）による賛成の趣旨が述べられている。例えば渋沢栄一は「論ずるところ豈切、慮るところ深遠、能く余等の言はんと欲する所を道破せり、以て世論を喚起し人心を振粛するの一端たるを得ん乎」といい、高田早苗は「萬邦協同人類帰一の大希望の下に、内には国民の発達を指導し、国家の発展を策し、外には東西文明の調和を計り、人類民族の向上を助けなければならぬ、而して此が為に目下の時局に対しては最後の責任を負擔する覚悟を以て、進んで積極的態度を執り、徹底的に悪を亡ぼし、暴を鎮むるの努力に励ま

なければならぬ。以上成瀬の言明に余は満腔の同意を表し、之に対し一言半句を加除するの必要を認めず。」と述べている。

第一次世界大戦の最中にあって、国家的差別や利害をこえて、宗教的・道徳的立場から新しい世界的調和を強く主張するものであった。

○『軽井沢山上の生活』大正十二年七月　菊版　一一八頁　パンフレット　桜楓会家庭週報編輯部

大正六年夏、軽井沢の三泉寮の夏期寮において、その当時の四年生（第十五回生）を対象に、十回にわたって、信念生活について講義したものの講演録である。軽井沢には、明治三十九年より夏期の学生修養会が開かれ、例年、最上級生がそれに参加することとなっていた。三泉寮のある敷地の一方に、小高い山があり、その山頂の大樅の木蔭は三泉寮の精神生活の中心的な場であり、講義も又そこで行なわれた。

本講義についてはその梗概が、桜楓会出版部『成瀬先生伝』四三〇頁以下、及び副島正人「軽井沢修養会における成瀬先生十回講演概要」（「泉」第二巻第六号～第四巻第三号）などにみられるが、前者の筆者、渡辺英一（当時、本学教授）は「要するに先生は神―生命の顕現として宇宙人生の一切を芸術と見、美をそこに発見してゐられるが、又神―生命を如実に顕現させるのが、人生の本務であるから、吾人の生活努力の理想目的は、天成の真芸術の創造に在るとされてゐたものといへる。更に総括的に言はば、先生の生活と事業との一切を貫いて、その思想の内面は宗教であり、その外形は芸術であった。――当にさうあるべきであったのである」と結論している。

日本女子大学の歴史の中で、成瀬校長時代のいはば宗教を基礎とする精神教育のクライマックスとなった、講義であったといえよう。

○　明治四十五年度（大正元年・一九一二年度）　十五項

明治四十五年七月三十日、明治天皇の死によって改元され、大正と変った。前述したように日露戦争後、すでに時代は動いていたのであるが、近代社会の成立と共にあった明治天皇の死は当時の人々にとって、一つの時代のくぎりを感じさせた。

本学は日露戦後の厳しい経済情勢の中で、進学者の減少を来し、この年の四月より、向う五年間、国文学部の学生募集を停止する状況においこまれているが、幾つかの明るい展望もみることが出来る。この三月に初めて附属豊明小学校の卒業生が送り出され、幼稚園から大学校までの一貫教育の体制が、明実共に整ったこと、六月に東宮妃の行啓があり、一私立学校への初めての行啓は、女子教育の重要性についての社会的評価につながったこと、同月休刊していた桜楓会の家庭週報が再刊され、婦人活動や教育の実情を知らせるようになったことなどがあげられる。

だが何よりも重要な事項は八月からの七か月にわたる、成瀬仁蔵の外遊である。この外遊には二つの目標があった。一つは当然ながら、欧米の教育の実情の視察であり、二つはこの春に発足した帰一協会の理念について、著名人の理解と賛同を得るためであった。八月四日横浜を出発、米国に渡り、十二月初旬英国に、翌年一月に仏・独に行き、各国の著名な学者・教育家・宗教家・実業家を訪問し、帰一協会の趣旨を説明して、賛同の署名（口絵参照）を得て、シベリア経由で三月に帰国した。この間の活動ぶりは『成瀬先生伝』の四七五頁以下に明らかであるが、この年度及び次年度以降の帰一協会関係の項目にもその成果があらわれている。

帰一協会の趣旨及び関係者は次の通りである。

# 趣旨

明治維新の始め、開國進取の方針定まりて以來、我が國運は諸種の方面に於て、駸々として隆昌の實を擧ぐると雖も、而かも、社會萬般の問題に關して、紛糾せる難問題續出し、解釋の前途未だ容易に樂觀し難きものあり。その原因が、諸種の方面に亘りて錯雜したるもののあるは、勿論なるも、之を内にしては、國民の道德信念が安住を得ず、之を外にしては、西洋の新文明に接して應接に遑なきために、新舊の思想文物が、未だ圓熟の調和を得ざるは、その主要なる原因たらずんばあらず。約して之を言へば開國進取の形先づ成りて、その精神の確立せざるは、實に今日の難關に遭遇する所以なりと信ず。

果して然らば、今日國家の中堅たるべき人士にとりての急務は、一方、殖産致富の努力によりて、國力の充實を圖ると共に、他方にて、一國文明の基本を確定するために、道德・教育、文學、宗教等の精神的問題に關して、堅實なる努力と、眞摯なる研究とを勉むるにあるべし。此の目的のためには、我が國民性の特色を維持し、國體の精華を發揮すると共に、又博く世界の思潮に接して、之を包容し同化し、以て開國進取の實を、精神的方面にも發揚せざるべからず。此の如きは、容易の事業ならざると共に、又實に前途多望の天職たらずんばあらず。

今日社會の實狀を見るに、政治家、軍人、實業家、教育家、思想家の別なく、道德信念の問題につきては、各々思慮考究する所あるも、未だ社會全般を支配すべき統一の勢力を得ず、諸種の思想信念は、この國民の天職を中心として、多少歸一の傾向を呈し來れるも、尚ほ未だ明晰なる歸着に到達せず。此の際、國民の中堅として、指導誘掖の位置にある者は、公明なる精神を以て、社會萬般の問題を研究し、特にその基礎を明瞭確實にするの任

務を負はざるべからず。人々各々その信ずる所に據り、又各々その職務に盡力すべきは、勿論なるも、是と共に、共同の精神を發揮し、摯實なる研鑽によりて、一は以て各自の信念を鞏固にし、一は以て國運の基礎を盤石の安きに置かざるべからず。

是を以て、本會は先づ社會の各方面に亘りて憂を共にし志を同ふせる人士の糾合によりて、研究と修養とに勉め、進んで世界萬國と共に、將來の文明に對する共同の精神を發揮し得んことを期す。

上來記載の趣旨によりて、本會は、先づ國内の精神的統一を圖り、更に別紙の意見書の如く、漸次外國の同志をも合同せんことを企圖す。その事業方法に至りては、先づ會合集議の中心を作り、研鑽討論の機關を設け、出版講演の方面にも、一着一歩を占め、終には國際的運動に資せむとす。依って左の規約を定め、有志の賛同加入を請ふ。

明治四十五年六月

（規約略）

評　議　員（＊ハ幹事）

井上哲次郎　　中島力造　　上田　敏

桑木嚴翼　　＊姉崎正治　　＊澁澤榮一

原田　助　　＊成瀨仁藏　　＊浮田和民

松本亦太郎　　シドニー・ギューリッキ　　＊森村市左衛門

會員

井上哲次郎　原田助　姉崎正治　莊田平五郎
服部金太郎　床次竹二郎　佐藤鐵太郎　澁澤榮一
早川千吉郎　大内青巒　吉川重吉　寛克彦
大橋新太郎　加藤正義　目賀田種太郎
和田豐治　高田早苗　釋宗演
片山國嘉　中野武營　森村市左衛門
高橋是清　成瀨仁藏　八代六郎
坪野平太郎　上田敏　江原素六
中島力造　桑木嚴翼　手島精一
村上專精　デ・シ・グリーン　澤柳政太郎
浮田和民　松本亦太郎　阪谷芳郎
服部宇之吉　海老名彈正　シドニー・ギューリッキ

○　大正二年度（一九一三年度）　十七項

この年も、女子高等教育不振の状況がつゞいているが、七月には桜楓会が託児所を東京小石川に開き、社会的活動を更にひろげた。年末の十二月十九日、日本女子大学校参考館が開館された。内容は、日本女子大学校歴史室・地歴室・英語室・家庭博物室・家事室・高等女学校生徒の考案及成績品陳列室・大正博覧会出品考案陳列室などか

ら成っていた。年来の成瀬仁蔵の主張である自学自動の教育実践を助ける為である。この年の六月、教育調査会のメンバーとなったことが、こうした参考館を設置する一つの直接的刺戟となったのであろう。翌年一月には、『新時代の教育』が出版されていることは前述の通りである。

この年度の諸項目には大正維新への情熱がみられるといえよう。

一方、前年度にひきつゞき、帰一協会の活動を行い、毎月一回の例会を開いて、相互に意見を交換していたが、帰一協会の活動の他に、更に宗教的色彩のつよい精神的団体を国内向に設けることとなり、仮りに自助団と名づけた。その内容や活動は『成瀬先生伝』四九五頁以下に詳しいが、その趣旨などは次のようなものであった。これによって、その当時の対社会的な精神活動をどのように展開させようとしていたかを知ることが出来よう。なお、自助団は第一次世界大戦勃発によって、実際的な活動は広がらずに終った。

## 趣　旨

（前略）大正ノ維新ハ、尋常一様ノ糊塗彌縫ヲ用フル餘地カ全ク無イ。必スヤ内ハ人々各自ノ衷心ニ貫通シ、外ハ全國民ノ生活に徹底スル所ノ、絶對的大確信ト、永遠的大努力トニ依ラナクテハナラヌノデアル。

各自ノ衷心ニ貫通シ、全國民ノ生活ニ徹底スル大確信大努力トハ何カ。天地ノ公道ニ於テ、國民ノ精神ヲ奮興シ、生活ヲ改善シ、國力ヲ充タシ、國勢ヲ張リ、以テ人類ノ至善ヲ行フコト、卽チ是レテアル。而シテ人類ノ至善トハ、人格的生命ノ完全圓滿ナル成達開現、卽チ是テアル。

抑モ宇宙ノ實在ハ精神的人格力テアル。天地ノ間ニハ人格的生命カ遍滿シテ居ル。之レ卽チ萬象ノ原力テアツテ、吾人モ亦是ヨリ來リ、是ニ歸入スルノテアル。之ヲ得ル者ハ生キ、之ヲ失フ者ハ滅ヒルノテアル。個人ノ生

滅、國家ノ興亡、孰レカ之ニ繫ラヌハナイ。天地ノ公道トハ、此ノ大元生命ニ自具スル、開達ノ秩序タルニ外ナラヌ。天地ノ公道ニ從フトハ、卽チ之ヲ信シ、是ヲ努メテ、以テ生ノ道ヲ得、死ノ緣ヲ避クルニ外ナラヌ。此ノ大元生命ノ確信ノ下ニ、各自ノ生活ヲ改善シ、全體ノ努力ヲ献シテ、國力ヲ充實シ、我カ國家ヲシテ、永遠ナル生命ノ道ニ於テ、振興活躍セシメナケレハナラヌノテアル。是レ實ニ吾人自ラ活ル事ニ依ツテ、國家ヲ活カシ、國家ヲ發展セシメルコトニ依テ、自ラ發展スル所以テアル。

國家ヲ成ス者ハ個人テアル。國家ノ内容實質ハ、國民各個人ノ外ニハナイ。國力ハ個人ノ人格力ノ外ニハナイ。是故ニ國民タルモノハ、各自ノ人格ヲ養ヒ、生命ヲ充タシ、苟モ之ヲ瀆シ、之ヲ傷クルカ如キ行動ヲ爲シテハナラヌ。各自ニ天地ノ生命ヲ亨ケテ生レタル、神聖ナル人格體タルコトヲ確信シ、獨立自活、努力奮鬪、自ラ運命ヲ開拓シ、功業ヲ成就シ、以テ之レヲ國家ニ献シナケレハナラヌ。依賴心、僥倖心ヲ排斥シ、迷心陋習ヲ打破シ、自己ノ生活及ヒ境遇ヲ改善シテ、進達止マス、以テ宇宙ノ生命開現ノ事業ニ參シナケレハナラヌ。

吾人ハ自己ノ靈性人格ヲ信スルト共ニ、一切ノ他人ニ於テ、亦靈性人格ヲ信シナケレハナラヌ。而シテ之ヲ尊敬シテ、苟モ之ヲ瀆シ傷クルカ如キコトナク、其ノ各自ノ發達ヲ自由ナラシメナクテハナラヌ。是レ蓋シ天命ニ於テ、各個人獨立ノ價値ヲ發揮スル所以テアル。而モ亦各個人ハ元來天地ノ生命ニ於テ一ニシテ、交々相感應融和協同一致スルコトニ依ツテ、互ニ相生長發育スルモノナルカ故ニ、互ニ一切ノ外形的藩籬ヲ徹去シ、誠心誠意、赤心ヲ推シ、肝膽ヲ披キ、交々相愛護扶養シ、人格ニ於テ相結シテ、以テ一個ノ生命體ヲ創造スルコトヲ要スル。之レ實ニ生命開展ノ根本要求ノ存スル所テアツテ、家庭、社會、國家等ノ、人類團體ニ、人格的價値ヲ生スル基礎テアル。

凡ソ人類ノ結フ團體ニシテ、人ノ生命ヲ託スルニ足ル所ノ者ハ、必ス人格的趣旨アルコトヲ要スル。國家ト雖モ、

亦生命アル、一ノ獨立人格體テナクテハナラヌ。國家ニシテ若シ人格的趣旨ナク、天地ノ生命ト關係ナキ機械ナラハ、人格體タル國民各個人ノ尊敬ヲ受ケ、信頼ヲ受ケ、犠牲ヲ受ケル資格ハナイ。國家ニシテ個人以上ノ活動體タル以上ハ、亦個人以上ノ大靈性ヲ具ヘタ、個人以上ノ大人格テナクテハナラヌ。此ノ如キ大靈性アル人格ナレハコソ、國家ハ中ニ幾百千萬ノ個人ヲ包容シテ、此ヲシテ各其ノ人格ヲ完成セシメタルト共ニ、自ラ永遠ニ發展スル力ヲ具有スルノテアル。現在ノ國家ハ必スシモ完全ナル人格體ト爲ツテ居ラヌ。ケレトモ其進歩發展ノ理想ハ、正ニ是處ニ在ル。

吾人ハ我カ國家ヲシテ、實ニ完全ナル人格的生命タラシメ、以テ無限ニ善美ナル使命ヲ遂ケシメナケレハナラヌ。是ヲ信スルコト、之レ卽國民ノ絶對的大確信テアツテ、是ニカムルコト、之レ卽チ國民永遠ノ大努力テアルノテアル。大正ノ第二維新ヲ成就シ以テ眞に天壤ト共ニ無窮ナル皇運ヲ扶翼シ奉ル根據ハ此ノ確信ト努力トノ外ニハナイ。而テ――

我カ五條御誓文ト、教育勅語ト、及ヒ帝國憲法トハ、國家ノ發達、國民各自ノ生活、及ヒ國家ノ人格ヲ組織スル統制ニ關スル方式ヲ、最モ善ク指示シタモノテアルカ故ニ、吾人國民タル者ハ人格的生命ノ確信ニ於テ、誠心誠意、極力之カ奉戴實行ニ努メ、以テ刻下ノ狀勢ヲ濟ヒ以テ、我國體ノ眞價ヲ永遠ニ發揚セネハナラヌ。

眼前ニ起伏スル世相ノ下ニ、深ク流ルル時代精神ノ中ニハ、屢々天啓的暗示カアツテ、吾人カ根本要求タル向上心ニ融激シ、一道ノ光芒閃爍トシテ、覺エス醒覺奮起セシムルモノカアル。吾人ハ深ク時ノ休徵ニ耳ヲ傾ケナケレハナラヌ。其ノ眞意を悟ラナケレハナラヌ。而シテ之ニ對スル反應進動ヲ怠リテハナラヌ。之レ卽チ天來ノ眞機會テアル。吾人ハ帝國ノ現狀ニ對シテ、以上ノ如クニ觀、以上ノ如クニ信シ、衷情眞ニ止ムコト能ハス、先ツ自ラ起ツテ奉公ノ赤誠ヲ致スタメニ、茲ニ一ノ實行團體ヲ組織シ、憂ヲ同フシ、志ヲ同フスル者相結ンテ、以

上ノ趣旨ニ從ツテ協力戮力、以テ國家ニ貢献シヨウトスルノテアル。吾人ハ各自ニ生活ヲ改善シ、努力ヲ新ニシ、此ノ確信ノ下ニ、勇往邁進スルト共ニ、人々互ニ相警醒誘掖シ、友愛的結合ニ依リテ、人格的生命ヲ充實活躍セシメ、以テ眞ニ國家ノ一礎石、一力原タル責任ヲ負ヒタイト思フ。

希クハ闔國ノ同胞諸君子、吾人ト共ニ國家永遠ノ目的ニ於テ奮起シ、刻下ノ救濟ニ力ヲ協ハセラレタイ。之レ實ニ吾人ノ切願テアル。

而シテ又同時ニ國家ノ深キ要求テアルト信スル。

## 主　義

一、自己ノ靈性人格ヲ信シ、内深ク之ヲ涵養シ、外廣ク之ヲ實現シ、以テ一切生活ノ根基ト爲ス。

一、他人ノ靈性人格ヲ信シ、之ヲ尊重敬愛シ、其ノ發揮ヲ助クニ努メ、又各人ノ信念ハ人格ノ内發的要求ノ結果タルヲ信シ、信仰ノ自由ヲ尊重スルニ努ム。

一、一切ノ人格體ハ、絶對ノ價値ヲ有スル獨立ノ生命體ナルヲ信シ、互ニ相瀆スコトナク、相犯スコトナキト共ニ、互ニ融合協力シテ、偉大ナル人格體ヲ作リ、生命ノ完全ナル發揮ヲ爲スニ努ム。

一、家庭、國家等ノ社會人類團體ハ、獨立ノ生命ヲ有スル人格體タルヘキヲ信シ、各自ノ生命ヲ献シテ、之カ發達進化ヲ計ル。

一、吾人ハ宇宙ノ實在カ、永遠ニ活動スル精神的生命ニシテ、吾人カ精神生命ノ本原ナルコトヲ信シ、各自ノ至善ヲ盡シテ、此ノ精神生命ノ發展ヲ助クルト共ニ、人々總テ相互交感同化シテ一トナリ、以テ宇宙人格ノ現成ヲ見ルコトニ努ム。

一、國家發展ノ原力ハ、國民各自ノ人格生命ニ存スルコトヲ信シ、擧國一致ノ献身ニヨリ國力ヲ充實シ、以テ人

類文明ニ對スル、帝國ノ使命ヲ行フコトヲ努ム。

一、五條御誓文、教育勅語ノ御趣旨、及ヒ帝國憲法ノ本義ニ從ツテ行動スルコトノ國民的献身ノ實ヲ擧クル所以ナルヲ信シ、之カ奉行ニ努メ、尚進ンテ人道ノ要義ニ遵ヒ、東西文明ノ融合ヲ計リ、以テ人類ノ安寧幸福ヲ增進センコトヲ努ム。

一、吾人ハ現在ノ境遇ニ滿足セス、常ニ確信ト希望トヲ以テ、絶エス之レヲ改善上進スルコトヲ努ム。

一、宗教、政治、產業、教育、學藝等ノ根本ヲ、人格ノ涵養、靈性ノ發揮ニ置キ、其ノ經營處理ニ於テ、此ノ根本主義ノ貫徹ヲ期ス。

一、團員ハ常ニ以上ノ趣旨ヲ體シ、本團ヲシテ融合的人格體タラシメ、以テ國家永遠ノ柱礎タラシムルニ努ム。

## 方　針

吾人カ革新事業ノ出發點タリ、將タ到着點タル所ノモノハ、人格的精神ノ現成ニ在ルカ故ニ、着手ノ順序トシテ必スヤ此ノ人格的精神ノ涵養普及ニ、最モ直接ニシテ、緊要ナル事業、及ヒ此ノ人格的精神ヲ具體化シテ、眞ニ國力充實ノ價値ヲ生セシムル事業ニ重キヲ置クヘキテアル。卽チ先ツ教育ノ改善ヲ第一トシ、次テハ、經濟實業ノ進歩發達ニ對シテ、國力集中ノ策ヲ講シ、而シテ漸次他ニ及ホスヘキテアル。依ツテ吾人カ運動ノ集中點ヲ左ノ如クニ定メル。

㈠自己修養

㈡國民ノ理想信念ノ啓發培養

㈢學風及學制ノ改善

㈣實業界ニ於ケル道德。經營力及其ノ效率ノ增進。

但シ教育ノ改善ト云ヒ、經濟實業ノ進歩發達ト云ヒ、此ヲシテ十分ノ效果ヲ擧ケシムルニハ、之ヲ全國民的事業トシテ、擧國ノ總力ヲ集中スルコトヲ要スル。從ツテ全國民統制事業タル政治ヲシテ、是レニ適合スル方法ヲ採ラシメナケレハナラヌ。是ニ於テ、

(五)政界ニ於ケル理想品格ノ發達

(六)確乎タル國家政策ノ樹立

(七)國民的政治家ノ輩出

ニ對シテ、適當ナル考慮ト努力ヲ加フルコトヲ要スル。併シ政治上ノ改善ト云フモ、吾人ハ何等黨派的政治運動ヲシヨウトスル者テハナイ。唯吾人ノ意見ヲ提出シテ、政治家及ヒ國民ノ參考ニ供シ、或ハ吾人ノ信スル國民的理想ノ實現ニ適當ナル、政治家ノ活動ヲ援助シ、或ハ進ミテ、吾人ノ運動ニ加入ヲ求メ、以テ協同努力ノ範囲ヲ廣メルニ過キヌ。

要スルニ、吾人ハ社會各方面ノ改善救濟事業ニ對スル、基本的一動力トナリ、自ラ努力スルト共ニ、適當ナル援助ヲ各方面ニ與ヘ、相提携シテ、以テ國家終局ノ目的ニ向ツテ邁進シ、遂ニ之レヲ以テ、全國民的運動タラシメントスルノテアル。

以上ノ趣旨テ作ラレタ、財團法人ノ規約ノ中ニハ、左ノ條項ガアル。

(下略)

○　大正三年度(一九一四年度)　十四項

この年の八月、日本はドイツに宣戦を布告し、第一次世界大戦における連合国側の一員となる。戦争にもふれら

れてはいるが、この年度の成瀬の関心は専ら、教育問題に向けられ、教育調査会などでも熱心に発言している。

○　大正四年度（一九一五年度）　十一項

この年度は、教育調査会でひきつゞき活動し、特に大学制度の改革が討議の対象となったので、大学教育法改善案を提議するなどのことがみられる。

第二は前年度にひきつゞき、学内では人格形成の為の信念の涵養について熱心に学生に講議している。

なお、十一月十日大正天皇の即位式にちなみ、民間教育功労者として、勲五等、瑞宝章を授与された。

○　大正五年度（一九一六年度）　十二項

この年の学内は、精神教育の徹底一色に終ったといってもよいであろう。四月の新入生より入学の自覚を新たにする宣誓式が行なわれることとなった。そして夏には、印度の詩人ラビンドラナート・タゴール（Rābindranāth Tagore　1861～1941）の来校があった。タゴールは、大正初年より日本の知識人にもひろく知られていた世界的な詩人であり、成瀬仁蔵もその著書に親しみ、来朝を機会に交流をはかり、共鳴するところがあって招待したのである。更に七月には軽井沢三泉寮の寮生に瞑想の指導を行ったが、タゴールもこの会合に深い印象を得て去った。この夏の経緯をへて、秋には教育と宗教に関する長い講演を行ったのである。

なお、桜楓会内には、成瀬の命名によって「天心団」が結成された。口絵の写真は、この天心団の精神を示すものである。

対外的には教育調査会委員としての活動は勿論、前掲の『新婦人訓』の出版がある。

○　大正六年度（一九一七年度）　十三項

この年度は、成瀬のこれまでの大学教育論を具体化して、新しい学制への脱皮をはかった年である。

年度始めにあたり、皇后の行啓を拝いだが、当日、大学として必要な研究の核として建築中であった、桜楓家政館が開館され、同時に校旗の制定をみた。（口絵参照）

そして新学制の出発に際して、再び国文学部の学生を募集しはじめ、教育学部を廃止し師範家政学部を設置した。と同時に全学を通じて必修科目を最少限度におさえ、選択科目の範囲を出来る限り広め、教授時間の減少も計った。新学制はいうまでもなく自学自習を徹底させる為であり、各人の個性を生かし、興味によって自発的な勉学を深めることを意図したものである。

教育制度上の大改革を実現したこの夏に、前掲の「軽井沢山上の十回講義」が行なわれたのであり、学内により精神的な気をふきこんだのである。

桜楓会の活動も活発であり、十月に東京を襲った暴風雨による災害に臨時託児所を五ヶ所に設けて救援活動を展開、物価騰貴の状況に対しては十二月末より翌七年春にかけて格安バザーを開催し、更には廃物利用展覧会（大正七年六月）、家事科学展覧会（同十月二十五日）などの諸行事に積極的に参加していった。

この年度、十月より一月までの間の執筆がみられないのは、腸チブスのため、十一月末病臥、入院し、大正七年二月十八日退院のことがあったからである。退院後病後の保養をなし、三月末には健康を回復している。

なお、大正六年の九月二十一日に、臨時教育会議が発足し、調査会にひきつゞき、委員となった。

○　大正七年度（一九一八年度）　十五項

前年度よりひきつゞいて開かれた臨時教育会議は頻繁に会議をもち、教育政策の決定をいそいでいた。成瀬仁蔵は「師範教育ニ関スル件」及び「女子教育ニ関スル件」の審議主査委員となり、後者については前掲の「女子教育改善意見」を印刷して配布した。その他、「小学校教育ニ関スル件」「視学制度ニ関スル件」「教育ノ効果ヲ完カラシムヘキ一般施設ニ関スル建議」などに積極的に発言し、特に最後の建議については「人心帰嚮の目標」(補遺に所収)という質問意見書を提出している。大正八年一月十三日の教育会議への最後の出席の際にも熱心に発言した(この時の主題はこの建議に関するものであった)。成瀬の発言はいづれも他の委員とはかなり違ったものがあり、充分な理解が得られなかったようにみうけられる。特に女子の高等教育論などは保守的な委員の入れるところではなく、その答申(大正七年十月二十四日可決)は、現状維持に止り、成瀬の先見性を示すものとなった。(海後宗臣編『臨時教育会議の研究』日本女子大学女子教育研究所編『大正の女子教育』その他参照)

学内的には大正八年を期して、総合大学建設への第一歩をふみ出す考えで、六月には基金募集の企画をたて、かたわら学制の理想的構想や、教育精神の徹底化のための諸準備がすゝめられていた。

しかし大正八年一月に遂に病床につき、告別講演を行い、三綱領の他、求めに応じて執筆し(口絵参照)三月四日、午前八時二十分、永眠した。三月八日、「成瀬校長功労表彰・女子高等教育問題講演会」が催され、遺志をついで、女子総合大学推進の議が決せられた。

翌日告別式挙行、帰一の理想をもち、永生を信じた成瀬仁蔵にふさわしく、既成の宗教儀式を一切まじえずに告別式が営まれ、二千余名の弔問者の列がつゞいた。東京豊島区雑司ヶ谷墓地に葬る。大正十一年四月墓碑除幕式、昭和三年四月『成瀬先生伝』・『成瀬先生追懐録』を桜楓会より発行、昭和八年四月、胸像(高村光太郎作)除幕式が行なわれた。

○書簡

(一) 井上友一郎宛　米国からの書簡であるが、井上氏については、現在のところ不明である。

(二) 麻生正蔵宛　日本女子大学創立以前のもの。本著作集第一巻及び第二巻に収めた書簡を補うものであり、創立事業を進める間の両者の深い信頼関係をよく察することが出来ると共に、創立の苦難も示すものとなっている。

(三) 服部他之助宛　服部氏（文久三年～昭和十一年）は成瀬仁蔵の妻、満寿枝氏の弟。従って早くから成瀬仁蔵の援助者であった。同志社及びアメリカのウアバシュ大学で学び、同志社・学習院教授となる。同時に、日本女子大学でも教え、大正十四年以降英文学教授及び評議員となった。

(四) 光本光宛　同氏については不明

(五) 富山虎三郎宛　同右

(六) 坂部静子宛　同右

(七) 平井たか宛　同右

(八) 桜楓館一同宛　訪米の旅中から、桜楓会にあて出されたもの。

(九) 玉木直子・正田淑子宛　玉木氏は著作集第二巻にも紹介したが、本学第一回（明治三十七年）家政学部卒『玉木直子先生』（桂花会）『日本女子大学々園史二』等参照。
正田氏は第一回英文学部卒。卒業後も母校に奉職。『日本女子大学々園史二』参照。

(十) 藤原千代宛　藤原氏は第一回国文学部卒。卒業後も母校に奉職、同前。

(十一) 藤原千代・手塚かね宛　手塚氏第一回家政学部卒、母校に奉職、同前。

(十二) 仁科節宛　仁科氏は第五回（明治四十一年）国文学部卒、成瀬仁蔵の秘書的役割や桜楓会「家庭週報」の記者

として活動した。

(三)　上代たの宛　上代氏は著作集第二巻に紹介したが、第七回(明治四十三年)英文学部卒、後、第六代日本女子大学々長となる。(2)及び(3)はアメリカのウエルズ女子大学に留学中の上代氏に出したものである。

(四)　荒川かず宛　荒川氏は第八回(明治四十二年)国文学科卒。(1)は桜楓会名古屋支部で、久野久子女史の音楽会を開催、日本女子大学校家政館建設の為の寄附金集めの催でもあった、その盛会ぶりを報告したものの返事である。

(五)　平野濱・都丸・月田カン宛

平野氏はフェリス英和女学校より成瀬仁蔵に懇望されて本学に移り、学生指導主任、評議員などを歴任した。『日本女子大学校四十年史』参照。

都丸氏については現在のところ不明。

月田氏は第十二回(大正四年)家政学部卒、家政学部部長・学監などを歴任した。『日本女子大学学園史二』参照。

(六)　井上秀宛　著作集第二巻に紹介したが第一回家政学部卒、第四代校長。

井上氏へ期待するところ大であったことがよくわかる。

○COLLEGE EDUCATION FOR WOMEN IN JAPAN　(明治三十三年、一九〇〇年)

日本に女子高等教育機関を設立するについて、その重要性、反対意見への批判、現在の設立準備のための苦心とその状況などがのべられている。

○THE CONCORDIA OF RACES　（大正五年・一九一六年）

第一次世界大戦に際して、ヒューマニズムの立場から戦を批判し、人類的な調和をめざす、帰一協会の主張を述べたもの。

○JAPANESE WOMEN AND THE WAR

ロンドンタイムスにのせた論稿であり、戦争と女性の問題をとりあげ、第一次世界大戦に際しての英国婦人の活動を賞讃し、日本婦人も知的な高等教育をうけ、国際的な平和や人類の幸福をもたらす社会の担手として、活動することを期待した論である。以下、三項の発表時は現在のところ確定出来ない。

○THE BEGINNING AND END OF THE NOBLE WORK OF DR.GREENE IN JAPAN

成瀬仁蔵の師ともいうべき澤山保羅（本著作集第一巻に成瀬仁蔵著『澤山保羅伝』が掲載されている）に大きな影響を与えた人物であり、同時に帰一協会の設立を援助した、グリーン博士についての紹介である。

追記

本成瀬仁蔵著作集の刊行が決定され、この最終巻が終了するまで、有賀喜左衛門前学長、道喜美代学長をはじめ、委員会の方々にはたえざる御励ましと御協力を得たことをここに改めて感謝申し上げる次第である。又多くの卒業生からも温い御援助を得たことを追記したい。

また、本著作集の刊行について、積極的に御賛同下さり、かつ題字も御書きいただいた有賀喜左衛門先生が、昭

和五十四年十二月二十日逝去され、本巻を御目にかけられなかったことは、担当者として誠におわびの申し上げようもない。謹んで御冥福を祈る次第である。

調査がすゝむにつれて新しい発見もあり、種々な問題や疑問も生れ、次第に頁数が増大すると共に、思わざる長年月を要する結果となって、各方面に御迷惑をかけた。第一巻発刊時に予定していた、参考文献及び索引を第三巻に組み込むことは、頁数や取り扱いの関係から割愛することとした。いづれ印刷に附したいと思っている。まだ、成瀬仁蔵記念室の諸資料は整理段階にあり、今後、補足を要することもあるかと考えられ、本著作集に関しても、力不足のため、疑問点も多々生ずるかと思われる。御わびと同時に、今後も御助言、御叱声をいただければ幸である。

本巻も、他の巻と同様、委員の方々に御協力を得たが、特に長田喜和先生には、書簡の解読を、石川ムメ氏には口絵写真の選定など、種々の面で御助言をいたゞいた。その他、日本女子大学女子教育研究所々員の真橋美智子さんには、編纂推進上全般にわたって、多大の協力をしていただいた。校正については、河合慶子、国吉瑤子、岡田ゆかり、桑原素子、高山美佐子、浦上美穂さんの諸姉にもそれぞれに助力を得た。厚く感謝申し上げる次第である。

第一巻から第三巻まで、大日本印刷株式会社に御世話になったが、担当の佐伯安江氏には長い間、様々の点で御迷惑をかけた。ここに記して、厚く御礼申し上げる。

昭和五十六年二月

（中嶌　邦記）

# 日本女子大学創立七十周年記念出版分科会

## 成瀬仁蔵著作集委員会

委員長　有賀喜左衛門（故）（昭和四十六年四月より同四十八年三月まで）

副委員長　道　喜美代（昭和四十八年四月より）

委員　中嵩　邦

　　中島　武雄

著作集委員会顧問　西原　慶一（故）

　　柚　トミエ

　　麻生　誠

同専門委員　菅　支那

　　長田　喜和

　　源　了圓

　　一番ヶ瀬康子

同　委員（幹事）　合田　信子

　　石川　ムメ

　　牛頭　栄子

　　五十嵐　康祐

　　真橋　美智子（昭和四十七年一月より）

昭和五十六年三月一五日印刷
昭和五十六年三月二〇日発行

成瀬仁蔵著作集　第三巻

編集　東京都文京区目白台二丁目八番一号
日本女子大学創立七十周年記念出版分科会
成瀬仁蔵著作集委員会
代表者　道　喜美代

印刷所　東京都新宿区市谷加賀町一丁目一二番地
大日本印刷株式会社

発行所　東京都文京区目白台二丁目八番一号
日本女子大学